

八

淳風

建保二年八月廿五日

牛乳殿



平合

秋出 秋風 秋

秋光 秋露 秋

秋花 秋月 秋

秋水 秋雨 秋

秋聲 秋意 秋

志林二年八月

Vertical text on the left side of the page, mostly illegible due to fading and bleed-through.





新合

建保二年八月十六日



秋風 題  
秋虫  
秋祝

秋露  
秋鹿  
秋旅

秋月  
秋花  
秋意

秋雨  
秋水  
秋懷

秋鴈  
秋霜  
秋雜

順德院

作者

女房

僧正行意

冬藏藤原朝長定家

宮内卿藤原朝長家隆

丹後守藤原朝長範宗

皇太后宮女藤原成好























かりはせし物久しうらみの半さいてやゆらん

九々勝

十番 秋雨

九持

僧正 并意

いづれ月約よりあきらまよ半さくとも秋の村雨

右

雅經別帖

風さくふきわれむら紫に法きしんて雲さくさ秋の村雨

右方空階雨滴落葉空窓深なりいゆさきいなるゆ

ゆりあられてちるふゆふゆをたの月約よりのあざ

ともおもわをちりてえんもいづれゆれお秋福

の事やゆらん

十番

九

皇家御

むらりの衣乃名もゆもゆらゆらゆらゆらゆらゆら

右勝

通具御

人をすくくくぬ新りまわり紫もよまあるれもさ

た衣のふしこまもあまこつらゆりのしきあに

やゆらん右雨滴梧桐山館秋のつら涼氣

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

十番

九勝

家隆別帖

秋のまのり人れりゆれつこまもあまこつらゆりのしきあに

右

能宗別帖

あまのりくむこつらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

たよの事ゆれこつらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

よゆれとゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ



あえ侍らんれはあえとてうらぬなしよほくあえ  
侍れにたわす

十五番

巨

女房

富本世のいりあめやいさるん凡ふきおき秋のむら

右膳

有家御

いさるん鳴々音れらた雲にびく雨やくく森の下露  
んや不路のまよ下露のまよ字のえはれあふさ  
うも雲をよどくふしうらむて景氣足ん  
らして侍れとわす

廿番

巨

光家

さやれあや庭もまよきと秋の父のあつらひ  
あつらひ

廿一番

後成御女

風ふせい雲うら花よれおるれとぬもわりり  
秋の文のあつらひさつらとまよきとてい  
なやのえ侍らんまよきとていさるん侍らん  
ぬもあつらひとていさるん侍らん侍らん  
たふらうら侍らん

廿二番

巨

後成御女

秋の侍れ秋のまよきとていさるん侍らん侍らん

右膳

家隆御女

かりねのまよきとていさるん侍らん侍らん  
あつらひのまよきとていさるん侍らん侍らん  
あつらひのまよきとていさるん侍らん侍らん  
あつらひのまよきとていさるん侍らん侍らん



ハ番

かきくもつとゆふきの花山うす死ふりや  
しくすえゆれいカ勝

左膳

女房

誰ぞもふ来ら秋風のとうつてし涙うたつ初がわのを

右

通具御

秋文ぬ衣かあらぬ秋をさしし姻止まをながねしも

右衣ののぬさるはかぬ牛ら心なりのつてし

わの中かえゆれしたるのいふあくまをゆれし勝や

ハ三番

左

三太郎

あつらひのれ涙やとじさるふらわらうらむ松

右膳

信正

ハ番

かみの梅乃りまはせよとまのそまをまわらうらむあ  
たのふれ涙の流りあまね風乃らうらむ  
らんちりまはせよとまのそまをまわらうらむ  
ふゆふあくくたつてゆれいむカ勝

左膳

龍宗朝臣

ふも道キしえわらんひのゆらまよひうらむ春は朝芳

右

有家御

秋乃かり風ぬれやひしてうらむわ泣をまよひぬらうらむ

左乃涙もよのゆらまよひのゆらまよひのゆらまよひのゆらまよひ

のゆらまよひのゆらまよひのゆらまよひのゆらまよひのゆらまよひ

のゆらまよひのゆらまよひのゆらまよひのゆらまよひのゆらまよひ



廿五番

九勝

雅江胡花

あさわらわのわらう海やとくゆらん宿うらさすおむれえ

右

光家

くひ田いひおくらる舟のゆわんそくもあまどくれ秋の令

右

ゆりれ右のよとまの秋乃のつこいれにゆかあや

右

くゆのうられい今すこくくえんういぬとまのうら

右

廿番 秋巻

右持

女房

秋乃の地の尾宛吹らる風めくふよあわらさくはあき

右

有家卿

秋乃むしれりちろおののれんちあわらく神事あしけ

右

秋の地風とありさあぬまのしきさうりゆめ

右

廿番

右勝

信正

くくあわおれすまのたのまわくもちらほくしきあやま

右

家隆胡花

路やふじまにあまは花乃集我といひあふとくあわ

右

秋乃のむしれりちろおののれんちあわらく神事あしけ

右

有家卿



古書

九勝

通具御

あまのしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほ

右

光家

秋をたぬあまのしほの原のよもろこのかしのよもろあまのしほ

あまのしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほ

古九書

九持

雅短胡長

月氣のついでぬまもたふとあまのしほのたけのうしをのりきりくも

右

花宗胡長

まじりしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほのたけのうし

あまのしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほのたけのうし

三古書

九

定家御

あまのしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほのたけのうし

右勝

俊成御女

ういしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほのたけのうし

あまのしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほのたけのうし

あまのしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほのたけのうし

三古書 秋鹿

九勝

女房

あまのしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほのたけのうし

右

家隆御女

あまのしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほのたけのうし

あまのしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほのたけのうし

あまのしほのたけのうしをのりきりくもたふとあまのしほのたけのうし



三書

九持

通具御

びりおろしをされどしりも月をわけて旅をさしよき安ん

右

雅鑑別伝

かりの入りしりも又も鹿の良なりき時を待たしり

ねうたにさきの初めのうらみもいふもいふもいふ

昔よりよき痛れいしりもいふもいふもいふもいふ

わづらん

三書

人

光家

ちのちのこいりもさしりも鹿の良なりき時を待たしり

右勝

草伏 有家別伝

わづらんをのりもいふもいふもいふもいふもいふ

三書

右勝

範宗別伝

時よりあしりもいふもいふもいふもいふもいふ

右

後成御女

うらみのちりもいふもいふもいふもいふもいふ

麻乃らまわし初め夕なわがいふもいふもいふもいふ

ねうたにさきの初めのうらみもいふもいふもいふもいふ

三書

右勝

僧正

秋のちりもいふもいふもいふもいふもいふもいふ

右

定家御











甲書

左膳

通具部

おのひししくはるれ秋のしほきすねあや文をん

右

光家

ちりうり本風とゆき水のあふりうりし秋のしほき

うきと秋のしほきあやなりうりし秋のしほき

あやのゆきあやのゆき

甲書

左

宮家卿

秋のしほきあやのゆきあやのゆきあやのゆき

右膳

雅經朝臣

昔河國のあやのゆきあやのゆきあやのゆき

あやのゆきあやのゆきあやのゆきあやのゆき

甲書

左膳

女房

今もあやのゆきあやのゆきあやのゆきあやのゆき

右

俊成卿女

あやのゆきあやのゆきあやのゆきあやのゆき

あやのゆきあやのゆきあやのゆきあやのゆき

甲書

左膳

女房

あやのゆきあやのゆきあやのゆきあやのゆき

右

光家

あやのゆきあやのゆきあやのゆきあやのゆき

あやのゆきあやのゆきあやのゆきあやのゆき

あやのゆきあやのゆきあやのゆきあやのゆき







右

范宗胡也

ふらふら秋のわきまをしすしすしの初秋の月乃九月廿二日  
たのふふの古好とよの好い太の九秋乃秋の道  
かすむふあこもえいりわもせつとあめくむあふこ  
ろろれちんゆく福を石相似物とやゆらん

辛酉秋祝

凡持

有家郷

老の伏せりれ秋風吹初くさるいふたむらり地のもまの

右

僧正

老つ人よりれと秋をいしくさるいふたむらり地のもまの  
お首いた井のふるれと海りれはしりかこゆにお持

辛酉

凡持

定家卿

いかに老をぬの代とせたと火とてその秋のけりり白菊は花

右

范宗胡也

きく乃花志のせし秋のふる月乃のぬりといらよせつむつ

たをふとあらもなしくたとすう平懐とゆらん先  
不分明

辛酉

凡持

女房

いすき瓜なりしそくしつわら子と秋のけりり白菊は花

右

家隆胡也

志のけりりせし秋のふる月乃のぬりといらよせつむつ

たをふとあらもなしくたとすう平懐とゆらん先  
不分明

たをふとあらもなしくたとすう平懐とゆらん先  
不分明

辛酉

凡持

光家



らよれかけのこころのしるし松枝よれあはれおみかた

素書 右脇

通具卿

あはれをらよれきまもいかにし神の言人のつむぎあ

たらよのせしみよのたれお井のこころよのあま

たもよのあまもしりしとゆつれをたれあはれあま

膳侍きいあや

素書

左持

雅經朝臣

神風や沸くすきらりゆ浪よらとをのあはれおみかた

右

後成卿女

あはつらりむしりし神のみまのあはれをたれおみかた

たのよよたそらりし礼いゆいゆあはれおみかた

福とやしりしゆらん

素書 秋縁

左

家定卿

あはつらりむしりし神のみまのあはれをたれおみかた

右

家隆朝臣

草もあはれいさかたのあはれをたれおみかた

あはれをたれおみかたのあはれをたれおみかた

あはれをたれおみかたのあはれをたれおみかた

素書

右持

通具卿

あはれをたれおみかたのあはれをたれおみかた

素書 右

雅經朝臣

月よあはれあまのあはれをたれおみかた

あはれをたれおみかたのあはれをたれおみかた



の中はあぐりしつの中をいれおぼりし  
ゆれを勝願ししとやゆらん

牛着

左持

女席

言ふよそのし牛着らんすれぬいのをよしの木の

牛着

範宗朝也

あつらやとえしりしも色付ぬ家ししもやうら時海  
まのきりは乃秋乃夕言らん小字を侍とま  
りし乃夕いくを見てもまの何ぬとやらん  
よにめりしく侍侍と又よの侍し侍も侍ん

牛九番

右

光家

うらつらぬや勝願のまの秋風小しむをわげしん喜れ

右勝

信正

かつりよし程さるる一箇のすうさく野は秋の夜そく  
た初め字んえ侍りま秋風あるともしむすいふ  
くまゆりや侍りしはは乃すう侍りしはあぢり  
りくあん侍りしを勝

牛着

左持

有家卿

あつらよとつりやいふこの山もさうや秋乃風

右

後成卿也

あつらよとつりやいふこの山もさうや秋乃風  
たさや侍りしとさうや侍りしとさうや侍りしと  
たれと侍りしとさうや侍りしとさうや侍りしと

牛着 秘意



守書 左勝

女房

まればや風の青は枝のなまきしに他は人ぬれはよ  
まお右

まじきぬりぬれはたあうそそ枝やえもくかうし  
凡の青は秋乃あはれ人よたしくゆきかた

守書

左持

光家

まじきり吹とれつきくまきぬれをさして命るらひの統

右

俊成卿女

おもひけり葉のりしもはなれぬふもいそはあはれあはれ  
まらぬ事ゆに勝願ふふの

守書

左持

通具卿

まじぬれやかの今まんのまはしきうし月とが

右

家隆朝臣

まかきふ林の春のらもしきしにむてまぬるま

まはれつまにしふにぬれはあはれか  
海にまをたむりゆんいつまもやひくやゆん

守書

左持

傳正

まきもはゆちれうまきしにのまうえ月もま

右

雅

同じよまきよわしはり道のふん花もまはあの下ま

た右にいんふもあはれゆきはあはれ  
まあすうあはれゆきはあはれゆき

守書



九

有家卿

まへに半く意せぬ神の流す心とともかきあふしの秋の

右勝

範宗朝臣

かきいりてきき葉はゆき白袂を秋のわがれをよめてゆく

たしよよはれ。右に秋のゆきと安んじし勝はく

平書 秋懐

左抄

女房

秋し月をみれば三ノム井れたるはまゝいづこもまじかきらぬ

右

雅經朝臣

あゝさや秋さよといふにぬきすかしの秋はまじかき

たよの父はゆき人化るといふ事思ひてまじかき

中人のりくはれは右とやまゝいづこもまじかき

ゆれの晴負の秋とてまじかきとてまじかき

平書

九勝

信正

今やさるあゆむ葉ふすしはしはるる命をまじかき

右

家隆朝臣

いにお身をいとおはせがわりのくはれしとくぬきのあは

たのふとてまじかきとてまじかきとてまじかき

あひせるまじかきとてまじかきとてまじかき

はくはれは力勝

平書

左勝

範宗朝臣

まじかきとてまじかきとてまじかきとてまじかき

右

俊成卿女

身といふまじかきとてまじかきとてまじかき







右 僧

おのれいさむしきしきあそくふかゆふのちかきあそび  
さゆりあそびのむかしをたぬあそびのあそびすい  
ふあそびあそび

車書

右持

通具卿

おのれいさむしきしきあそくふかゆふのちかきあそび  
さゆりあそびのむかしをたぬあそびのあそびすい  
あそびあそび

右

有衆卿

おのれいさむしきしきあそくふかゆふのちかきあそび  
さゆりあそびのむかしをたぬあそびのあそびすい  
あそびあそび

車書

右持

雅經朝臣

おのれいさむしきしきあそくふかゆふのちかきあそび  
さゆりあそびのむかしをたぬあそびのあそびすい  
あそびあそび

右

光家

おのれいさむしきしきあそくふかゆふのちかきあそび  
さゆりあそびのむかしをたぬあそびのあそびすい  
あそびあそび

車書

右持

家隆朝臣

おのれいさむしきしきあそくふかゆふのちかきあそび  
さゆりあそびのむかしをたぬあそびのあそびすい  
あそびあそび

右

後成卿女

おのれいさむしきしきあそくふかゆふのちかきあそび  
さゆりあそびのむかしをたぬあそびのあそびすい  
あそびあそび







親季朝長

中官少将

右方

民部卿曲侍

信實朝長

隆祐

行徳朝長

下野

正三位知家

判者

權中納言定家

知家

權中納言定家

忠俊

源家清

中官但司

兼康

一番 寄衣憲

右持

これら并乃よりめの衣くらそんで心のなほなほ

右

山姥乃るめぬ衣もこれら并れぬにそやいぬを

左太右可申不ぬく台波原両方共可申

事と申し紅衣のち大抵同心均法深難分

各申

一番

右膳

春官權本又良實

右

秋草花流る衣とさふせひ袖もとぬ袖も











わし分るる人并夜はしものしをいふのみを為す

右膳

下野

いかにもまのいへし袖わけてよるにぬぬはれし  
浪り夜を家並しゆぬ又ちりし事  
あゝぬらしやふくれぬていへん夜整さる  
とての膳

十番

左

知宗

我れよこしもあるぬ〜風ふきかぬ夜をいふ

右膳

兼康

いふる身いりのせよ友衣るし海をて侍  
たふに可成申有右弁をれをゆき侍  
なふり〜き〜礼膳

十番

左

中宮少将

いふも衣〜し〜き〜山〜い〜く〜花〜れぬ床〜糸〜の〜

右膳

正二位知家

唐あ〜れや〜かの夜もま〜し〜あ〜ぬ海〜の〜さ〜ゆ〜ぬ  
左傳ふ〜し〜き〜名〜右れや〜か〜れ家〜あ〜き〜れ  
あ〜ぬ海〜乃〜ま〜り〜は〜ん〜人〜殊〜小〜高〜人〜い〜し〜力〜膳

十番 寄鏡憲

左

九条大納言基家

い〜れ〜し〜石井乃あ〜の〜す〜か〜み〜あ〜ぬ〜糸〜を〜か〜ゆ〜る

右膳

民部卿典侍

い〜ん〜ん〜ま〜し〜さ〜ぬ〜か〜え〜乃〜糸〜や〜た〜海〜へ〜ま〜ゆ〜か  
石井のあ〜れ〜し〜あ〜る〜事〜れ〜う〜あ〜ら〜ち〜ま〜ゆ〜か











ままかえんぬれ浦乃名をさるし申すねがひあり  
ままかえんぬれ浦乃名をさるし申すねがひあり

右 下野  
ういりりくもあゝあまますのんわむけくおねのつ  
あ首張もあゝあまますのんわむけくおねのつ

古番

左膳

和宗

さししかくこころかこころ馬あつらひのひんをさるし  
さししかくこころかこころ馬あつらひのひんをさるし

右

兼康

ますかえんうつれつらみら我ん氣あつらひ  
まのよの流らくもあまますのんわむけくおねのつ  
まのよの流らくもあまますのんわむけくおねのつ  
まのよの流らくもあまますのんわむけくおねのつ

古番

左膳

中宮少将

ういりりくもあゝあまますのんわむけくおねのつ  
ういりりくもあゝあまますのんわむけくおねのつ

右

五位左大臣

かこころあゝあまますのんわむけくおねのつ  
あ首上得矢可あつらひのひんをさるし  
あ首上得矢可あつらひのひんをさるし

古番

九條大納言基家

あゝあまますのんわむけくおねのつ  
あゝあまますのんわむけくおねのつ

右

兵部卿曲侍

あゝあまますのんわむけくおねのつ  
あゝあまますのんわむけくおねのつ  
あゝあまますのんわむけくおねのつ  
あゝあまますのんわむけくおねのつ



古書

とらふらふらうち記述の作あり名は名尸  
しん家よりとくくつてけしてやうん心作らん  
秋の夕やうりめしつわいといふ偏の時雨の  
深紫乃色班月高心珍是為樹木之名  
字之長そり夫之語強之明依そ無非右可勝之也  
被作

左膳

春官權本良實

足らぬれぬ比のまのしすき半とて女らなるひん松の

右

京極中納言之長

かちん乃むもゆき清乃ふ心こやきゆぬ用のとらふ

あつられとゆしすき半とて女のきをねらひ

下ふたの膳

古書

左膳

右進勢為家

しん家よりとくくつてけしてやうん心作らん

右

後實朝長

我がしん家よりとくくつてけしてやうん心作らん

右奇母指事奇有明乃とてゆこ人のゆくの膳

古書

左

前官内卿家隆

しん家よりとくくつてけしてやうん心作らん

右

忠俊

まのまのいり路の葉の末葉うわなまゆ袖小高

左河半とてふふつとてゆを伝のしり又り

葉の末葉うわなまゆ袖小高

ゆりうふらひのまの帯にふるんる



廿九番

左

長冰御成實

あひさうわごゆきやうほれしよそふんはるる

右勝

隆祐

あひさうく田の川所とすそふおとふしはるる  
右方と共筑生田の川らとふれんふふふあふ  
あひさう可勝の中申

廿九番

左勝

資孝朝長

あひさうくうらんそふあひさうくたれ  
右  
源家清

人あふられゆきまのまふふふふふふふふふふ

者よりよみるあまさられんふふふ初五字

今ふのいよもあふあゆ中彼作下らふふ

あまふは理あけ左優らふ中彼は勝

廿九番

左勝

家長朝長

あひさうくふふふふふふふふふふふふふふ

右  
行徳朝長

あひさうかみれとゆむすいそふれ契りれふふ  
あひさうあふあふあふあふあふあふあふあふ  
あひさうあふあふあふあふあふあふあふあふ  
可勝の中被ふ

廿九番

右  
頼氏朝長







子んかのつち神まらるゝ高瀬の志ちひらくまゝなる  
右 玉部御曲仕

かひの明くさるゝ玉かんてれつゝあゝぬ神の徳たつ  
右 高瀬の玉同心小侍仕人カ持

世書  
右持 春宮権大夫良實

高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 京極中納言之家

世書  
右持 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉

世書  
右持 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉

世書  
右持 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉

世書  
右持 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉

世書  
右持 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉

世書  
右持 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉

世書  
右持 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉

世書  
右持 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉

世書  
右持 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉

世書  
右持 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉  
右 高瀬のたつ礼より家祓よりなる高瀬の玉



右膳

隆祐

人より世をよきとすまはるる神を祀るに流し玉  
たす珠得たをよきとすまはるる神を祀るに  
流し玉とすまはるる神を祀るに  
右膳ありやゆし

左膳

左

資孝朝長

志より世をよきとすまはるる神を祀るに流し玉とすまはるる神を祀るに

右

源家清

志より世をよきとすまはるる神を祀るに流し玉とすまはるる神を祀るに  
志より世をよきとすまはるる神を祀るに流し玉とすまはるる神を祀るに

左膳

左

系長朝長

志より世をよきとすまはるる神を祀るに流し玉とすまはるる神を祀るに

右膳

行徳朝長

志より世をよきとすまはるる神を祀るに流し玉とすまはるる神を祀るに

右膳

左膳

頼氏朝長

志より世をよきとすまはるる神を祀るに流し玉とすまはるる神を祀るに

右膳

仲富朝長

志より世をよきとすまはるる神を祀るに流し玉とすまはるる神を祀るに  
志より世をよきとすまはるる神を祀るに流し玉とすまはるる神を祀るに



ふからしめて中の人の時

軍書

左侍

親孝朝長

若乃うんれ流津はまのうらつらひなりいふまをさふ

右

下野

りまの神の流津はまのうらつらひなりいふまをさふ

右侍 小傳ちかひりしりし為持

軍書

左

親宗

おののうらつらひなりいふまをさふ

右侍

兼康

かきまの流津はまのうらつらひなりいふまをさふ

右侍 小傳ちかひりしりし為持

軍書

左侍

申良少将

しりまの流津はまのうらつらひなりいふまをさふ

右

正三位の女

しりまの流津はまのうらつらひなりいふまをさふ

玉流ちかひりしりし為持

軍書 寄枕恋

左侍

九条大納言基家

ちかひりしりしりし為持

右

民部卿典侍

しりまの流津はまのうらつらひなりいふまをさふ

右侍 小傳ちかひりしりし為持



軍六番

大

春宮權左良實

三つねはしとこのの兵うと枕あつかり秋若色れおひつ  
右婦 權中納言定家

こまねはよこらせはほのた枕さこむとこのま月日わ  
こころはまうとれつの子枕窓のこころは色深く  
ゆは縁がらふもゆふ影枕依り氣色為勝

軍七番

大膳

右馬頭督為家

こまねまえは床のこころは涙に枕をゆてん今夏は  
大 信實朝臣

まことわれ枕をりやあふらんいづれ秋のまはれ  
右方もわうくまふんゆると床のあはれつとるは  
の所

軍八番

大膳

前宮内卿家隆

うさうさあし涙ふんよふとわらつて秋のまはれ  
大 忠俊

たりきわいしあやめは秋ふむすいこもあまは  
まの枕妖艶こゆまふつとれ枕のうらはばあ  
こゆ依りわ膳

軍九番

大膳

兵部卿成實

こころに神の涙とまふめは枕う恋れ潤もあはれ  
大 隆祐

まよふともう枕りちりなげり人さねおれまふら  
枕う恋れ潤もあふからむわとつとるはあまは







辛酉 左侍 中官 右将

辛酉 左侍 中官 右将

辛酉 左侍 中官 右将

辛酉 左侍 中官 右将

辛酉

辛酉 左侍 中官 右将

辛酉 左侍 中官 右将

辛酉 左侍 中官 右将

辛酉 左侍 中官 右将

辛酉 寄帝憲

左侍

九条大納言基家

侍 左侍 中官 右将

右

民部卿曲侍

右首侍 小侍 右侍

辛酉

左侍

春官 持事 良實

右 左侍 中官 右将

右首侍 小侍 右侍

右首侍

辛酉



牛九番

本末の誓為家

あまのつれまののりちり常たあまののりまもむもるぬ

右膳

信實朝臣

りりやれ志のりちり常乃りわりやむもるぬ

右弁侍小侍いた初め定字はぬくまを侍りてたぬ

牛九番

右持

前官卿家隆

めらりあまをむもるぬむらちり常れりみらにのりちり

右

忠俊

むらちりのりちり常れれりむらちり常れりむらちり

むらちりのりちり常れれりむらちり常れりむらちり

名平むらちり常れれりむらちり常れりむらちり

とてたむ

牛九番

右膳

本末御成實

あまのつれまののりちり常たあまののりまもむもるぬ

右

隆祐

むらちりのりちり常れれりむらちり常れりむらちり

花田のむらちり常れれりむらちり常れりむらちり

牛九番

右持

資季朝臣

あまのつれまののりちり常たあまののりまもむもるぬ

右

源家清

あまのつれまののりちり常たあまののりまもむもるぬ

あまのつれまののりちり常たあまののりまもむもるぬ

牛九番



大

家長朝臣

悪きものさしにさしおのれどすりあれん一にけさるれん  
のた 行徳朝臣

あゝまきれいふる一いひらき一ありのほともぬき  
あゝまきれいふる一いひらき一ありのほともぬき

卒三番

頼氏朝臣

月草丸のめくればらのけけりそめりたるさそそい

のた 中宮但馬

むすいあまき一ありの半とあいの城の井と下帝はくあ  
た優おゆゆり一ありのわ勝

卒三番

親季朝臣

いひらきいひらきいひらきいひらきいひらきいひらき

のた

下野

石川金あぬあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

のた 馬失わ持

卒三番

和宗

あゝまきれいふる一いひらき一ありのほともぬき

のた

兼康

あゝまきれいふる一いひらき一ありのほともぬき  
あゝまきれいふる一いひらき一ありのほともぬき

卒三番

中宮少将

あゝまきれいふる一いひらき一ありのほともぬき  
あゝまきれいふる一いひらき一ありのほともぬき



右 三位知家

いふに此の如くはしむすしきとて同くはしむけぬと  
又申一白は不徳勝局

平七番 寄来意

右勝 九条大納言基家

あしぬをかんしれやうあふかにはりてあつたふり  
右 大

平七番

平九番 右 糸洞乃一りおれはくしあつたつてあ勝

平七番

右勝 春宮権左良實

きりあふしきまのよしにむく糸乃あつたふり  
右 権中納言定家

あつたつたれはくしあつたつてあ勝

右 殊勝之申者一仍あ勝

平九番

右勝 右 土御誓為家

あつたつたれはくしあつたつてあ勝

右 依實朝臣

平七番

右勝 前宮内卿家隆

あつたつたれはくしあつたつてあ勝

あつたつたれはくしあつたつてあ勝



今乃たのむをいふにけりてよとにりてあつてさうえはりき  
柳れらぬの田糸もほよまきむかりて実んはれ  
依之殊作わたり勝

車三番

左持

長部卿成實

あふぬあふまきあふまきあふまきあふまきあふまきあふまき

右

陸祐

今乃たのむをいふにけりてよとにりてあつてさうえはりき

お首殊又之指芳欣

車三番

左持

道孝朝臣

あふぬあふまきあふまきあふまきあふまきあふまきあふまき

右

源家清

今乃たのむをいふにけりてよとにりてあつてさうえはりき

結着る方陽貞雅大切を指得夫又指別交唯雄

車三番

右

家長朝臣

あふぬあふまきあふまきあふまきあふまきあふまきあふまき

右

行徳朝臣

あふぬあふまきあふまきあふまきあふまきあふまきあふまき

いぶぬあふまきあふまきあふまきあふまきあふまきあふまき

あふぬあふまきあふまきあふまきあふまきあふまきあふまき

車三番

右

朝臣朝臣

あふぬあふまきあふまきあふまきあふまきあふまきあふまき

右

申官徳



なやとよききりあふるあふれさぬあはれしをわが  
あふれ可勝中被さ

車書

右

親季朝臣

ましまさやかきしむあふれさぬあはれしをわが

右

下野

あふれさぬあはれしをわがあふれさぬあはれしをわが

五首之殊侍失之申す

車書

右

知宗

あふれさぬあはれしをわがあふれさぬあはれしをわが

右

兼康

あふれさぬあはれしをわがあふれさぬあはれしをわが

白糸乃あふれさぬあはれしをわが

車書

左

中宮女将

あふれさぬあはれしをわがあふれさぬあはれしをわが

右

あふれさぬあはれしをわがあふれさぬあはれしをわが

あふれさぬあはれしをわがあふれさぬあはれしをわが

右

車書 寄遠恋

右

九条大納言基家

あふれさぬあはれしをわがあふれさぬあはれしをわが

右

氏部卿典侍

あふれさぬあはれしをわがあふれさぬあはれしをわが



傍に乃木之指要之旨を申す女の時

左持

春言按本良實

御行成布一みのことしる福あひまきしてはわが

左

京極申納言定家

あけり給は露のひかり移りやしらもんきくそ

全番

左

左木門督為家

あやとひのちかれ小田れい肌じは流るる袖のまき

全番

左

亦言内御家隆

名祢彦人あやう人あやむらとあまのまはし

左

忠俊

むらやうれあ乃あとのまきうはまうま

左

信實朝臣

いづつようとせあふいあむ海はあまのまはし

左

能者申依作左膳

全番

左

長部郷成實

あやひしあはら乃あはれまきとあはれまき

右

隆祐

あやひしあはら乃あはれまきとあはれまき

あやひしあはら乃あはれまきとあはれまき

左膳







左惠すあまの御いよまはまの御いよま  
いよまの御いよまの御いよまの御いよま  
ちうさゆいよまの御いよま

牛書

右持

知家

右持の御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

右

兼康

牛書して御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

右持の御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

牛書

右持

中宮少将

牛書して御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

右

正二位知家

牛書して御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

右持の御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

牛書 寄服憲

右持

九条大納言兼家

牛書して御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

右

民部卿兼侍

牛書して御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

右持の御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

牛書して御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

右持の御いよまの御いよまの御いよまの御いよま

牛書

右

春宮指直兼良貴

牛書して御いよまの御いよまの御いよまの御いよま



石勝

持中納言之家

白砂の袖乃浦の... 丹後守海軍

年の終る... 丹後守海軍

かき可... 石勝

九斗書

左

兼右督為家

うき申... 丹後守海軍

右勝

信實初位

のあり... 丹後守海軍

うき申... 丹後守海軍

九斗書

左

前宮内卿家隆

浪を... 丹後守海軍

右勝

忠後

見向... 丹後守海軍

人の心... 丹後守海軍

く... 丹後守海軍

遠遠... 丹後守海軍

九斗書

左勝

兵部卿成實

ま... 丹後守海軍

右

隆祐

ま... 丹後守海軍

た... 丹後守海軍

た... 丹後守海軍

九斗書











右

行徳朝臣

あまのしほきさるまゝにわらひぬらふかきか  
いまも同前

夏番

左持

頼氏朝臣

およそしたふたのまん汁をうひひてあまのしほき  
右 仲宮但司

わく網のこひきんめふもてしほき  
左 夏番のうーくーされての勝

夏番

左持

親孝朝臣

うーしほきしうーかんしりしほきあまのしほき  
右 下野

仔細れ海むといぬかふしう網のしほき人ぬらう  
心も網むしほき

夏番

左持

知家

あまのしほきあまのしほき網のしほきあまのしほき  
右 兼康

うまのしほきあまのしほき網のしほきあまのしほき  
左 夏番

左持

中宮少将

あまのしほきあまのしほき網のしほきあまのしほき  
右 正三位知家

あまのしほきあまのしほき網のしほきあまのしほき  
左 夏番



松本能勝願

左志方人者被申く初不覺と上七旬く老老病腸惘然夏書  
く傳方已迷惑雖杖窮強之助刀難詩救端之鉄頭當府指  
與味後日跡迷是非不他致子細之可括其朝欽

勝願九方

九兼大納言 勝三持五  
頁三

春宮控左 勝三持二  
頁二

太志つ督 勝三持五  
頁五

前宮内卿 勝三持二  
頁二

兵部卿 勝三持二  
頁三

資季 勝三持二  
頁三

家長 勝三持二  
頁二

頼氏 勝三  
頁七

親季 勝三持五  
頁三

知宗 勝三持五  
頁三

少將 勝三持二  
頁二

右女之

<sup>辛云</sup> 嘉禎三年二月十八日申後衣衣大納言殿御奉三月二日書字  
同官一授年

正和五年十二月十二日成實院の卒せそとわね風乃書  
寒一之書ありき風も元うらも身れおのいとをれぬきり  
くやこくれゆやの月日は心いよりよいらかきとせり  
まじつーやまひりいなりぬ



弄合 宝治二年

題

早春辰

山花

五月節公

初秋風

海邊月

野外雪

悲久意

逢不會惠

施宿風

社頭祝

作者

凡

女房

太政大臣

權大納言源朝臣道忠

權大納言藤原朝臣定雅

權大納言藤原朝臣公基

中納言藤原朝臣為經



右近將源朝臣道成  
右近將源朝臣有教  
右近將源朝臣師純  
右近將源朝臣經朝  
右近將源朝臣為氏  
右近將源朝臣為教  
右近將源朝臣為教

右

兼明門院小宰相  
後成卿女  
持大納言藤原朝臣實雄  
持大納言藤原朝臣公相  
左近將少將藤原為教

散位藤原朝臣信實  
右近將中將源朝臣雅光  
弁内侍  
右近將中將源朝臣雅忠  
下野  
少將内侍  
沙汰禪信  
前大納言藤原朝臣為家

諫師  
談師  
判者  
前持大納言藤原朝臣為家







後成卿女

右のきり程よりけり伏乃其れ也小かすみせりら明りぬ  
た乃此ばさよふきよせんかよのぬよふきよふに  
はらうりへお下向といはれはあえておろく侍らよ  
右きつあをさるばいいつゆみよきうしく侍らあま  
はいつちよしくつくと侍

三番

左 指大納言源朝臣通忠

春日野乃草丸のふ雷たんとみよりをさむかすむ

左膳

指大納言藤原朝臣實雄

あいつらとて果しをれおけり侍りてあてあて  
左のま自路をたつてつらふん侍らぬらよふんと  
しよとてむくあつらふれ侍らやあつらふん心ゆめ

書

左持

指大納言藤原朝臣足雅

あいつらとて果しをれおけり侍りてあてあて  
太 指大納言藤原朝臣公相

あつみよわしれをすんてきつれやあつみよわしれをすんてきつ  
左かすんとて果しをれおけり侍りてあてあて  
うんてはらん春小あつみよわしれをすんてきつれやあつみよわしれをすん  
あつて侍れあつて侍らもきつえかひあつて又り  
よめしれあつて侍らよめしれあつて侍らよめしれあつて侍ら  
すんて果しをれおけり侍りてあてあて  
よめしれあつて侍らよめしれあつて侍らよめしれあつて侍ら

よめしれあつて侍らよめしれあつて侍らよめしれあつて侍ら  
よめしれあつて侍らよめしれあつて侍らよめしれあつて侍ら



書

左膳

持火納言藤原朝臣基

いすも程書いさりのけり胡麻寺そらやいじいんをちをきいじり

右

凡近少将藤原朝臣為教

天乃戸丸明納言かすつ又あゝ玉乃んふをきいじり

左書少将藤原朝臣為教

よろりゆりゆりよや右あゝりれり明言かんちりゆれ

いむいカ膳

書

左膳

中納言藤原朝臣為経

よきやう(美津いん)これあゝりり新バとまゆやあをき

右

散位藤原朝臣信實

胡麻の風いそをぬあゝ玉れりゆりゆりきいじり

七番

左膳

右馬督源朝臣通成

云はる乃あゝりゆやと我れんし書れりすして見ゆらぬ

右

右近衛持中源朝臣雅光

ゆりあゝりあゝりの心いさかさんそゆりゆりたうす

右天正少将源朝臣為教

程いんそとんそい教のえれりすあゝりゆり

ゆりゆりいんそとんそい教のえれりすあゝりゆり

いんそとんそい教のえれりすあゝりゆり



八番

左

兵部卿源朝臣有教

此のむかし言きたるは天は元明なりりてその

右膳

井内侍

云れ原言りの元乃すす次はきくらりなるも

右方言きれ元いつれさか小んくこれ侍るぬと

乃の元言と事くふあうとくしき事なり侍る

九番

左膳

右近将中將藤原

去り代乃なり先れ其のこころりきと元しきなりや

右

右近将中將源朝臣雅忠

ふりやと元言と事しは元んそかすいしらすき言方

たはばりりりめのはれのこもさくんむそかしく侍る

十番

左

沙弥蓮性

さよの事はらうとわらうし其のつうそ井なるり小

右膳

下野

こが元元乃事あれ衣袖さそきしと元ん侍る

たごわよりくく云乃原を井たさうに侍る

あつこはるは侍る元同よ今元侍れはさうい

今朝いすすめありと侍る今元元んやが

侍るん元元あれ衣さる侍るすくさきとよみり

しりあつと元元は侍るたわて目とさう侍る

たはらつと元元事侍る侍る右膳小侍る

十一番



十番

右持

丸道持中将藤原朝臣

あつむ乃年とつるを頼り子らんし一もいしき比小き

右

右将内侍

久望れあましにころしれ朝事あきらころしとれ也まあ

右方の朝事あつむ乃年とつるしとれ元は

ふやといくちもれ法決んころしとれ

十番

丸

丸京指交藤原朝臣

よふやの事いよふしつかつし曉ししてをふの事よま

十番

右膳

沙汰御信

長きやとたりしあつむの事これあつむの事いよま

丸寺を年乃明りしつる事とかけしとれ

十番

けりさしをころしふんたりしとれ也あつむしよ  
えんよくえんあつむの事とれ也とれ也とれ也  
とれちりつる丸膳ゆし

丸膳

丸陽門院越前

めしつる事いよまをころし日れ事しつるぬあつむの初也

右

右指大納言藤原朝臣為家

いりりよあれ夜うらきころし言もあつむとれ

丸事といひ白氣しつるぬあつむの初也

丸海くつれえあつむの初也

丸海くつれえあつむの初也

丸海くつれえあつむの初也

丸海くつれえあつむの初也



















ゆきやなしてうしろくまや結家おん板  
かほなるまきこぬやうに安んじられたる  
ていた勝作の

世書

た

江朝胡ト

右路山様はまよふ心もあらず早風つる雲をよみし

世書

山田禅信

横流のつらぬみとこけりゆきとこわらぬまはせり

た方人丸の目よといつる家右乃の事と今れ

世に及ぶぬ心をりて文小海よちたくり定

ゆらんすも流と波と源ととわん心は横流れ

なまねら風斗はてゑの心いこころんはゆきと

はくといふこといふ事とわん心有るを思はゆ

むん太の勝

世書

た勝

越前

より一登れぬ風のころりいなりぬれ空のれまもし白雲

右

前権大納言為家

老の身にふりまじり乃坂とてふれとくちるる

た心乃心はほりたもやとくちるるまじりの坂

元早乃安あよふ書あふたふい人のる物

元のつたはなうしてふれ小んころ西教の

くみそくちるるにこそを可き

世書 五月郭云

た勝

女房

里をいしていまはつらち郭云五月と人かまひのあま



右

小宰相

とものほまひも驚れし時身み月れそなわきまきそきえ  
たき甲しうれていゆらうらうらとそとそ月と人をめく  
ひりきりめとゆ家んあまにちつてく何をいふ  
なまもひのけりきふあまもくとれあ道不ま  
ゆめたちこーきと罪のゆりゆしよあは  
あまやりの衣あしうれてみ月のやなとそ  
あんとそはさるといふあまきすくゆにた  
たあ晴

其書

左晴

右政大臣

わきのことあやみ月れ郭をきれも福元よまよき  
右 俊成卿女

のそく若れ新海乃をもちん月小月下とそ命いふ  
我のそとちや月そしれも福元よまよき  
きくとゆりそとたのほをよまに衣あま  
ぬ福元よまよきとちん中りゆれゆれと  
ゆいてみ月とそとゆりも同一んそあま  
きやれ

其書

右

推大納言通忠

そと月れのあまよみ月れ時ちふとこのあまよき  
右 推大納言實雄

あまよきとちや雲の郭を今とそこの月よま  
左 右をよまよきとちゆれゆれと  
あまよきとちゆれゆれと



三浦の侍久しや

世書

右持

権大納言定頼

つぎしるまひとつとて郭をなくはれいふこれのり

右

権大納言公相

今よりいさよきまをなすまじらまきちりし月

つぎしるまひとつとて明の元はんあいつてつとや

二月の元はんあいつとつとてつとや

つとてつとや

つとてつとや

つとてつとや

つとてつとや

世書

右持

兵部卿有教

八月の元はんあいつとつとてつとや

右

弁内侍

あそといふまはあつとつとてつとや

右右納言あつとつとてつとや

つとてつとや

つとてつとや

世書

右持

右近中将師純

いさよきまをなすまじらまきちりし月

右

雅志朝臣

あそといふまはあつとつとてつとや

あそといふまはあつとつとてつとや



世書

沙汰連收

はつきいそあやふ川うくまふ書よま

右膳

下野

みりあのおりまかこころおのり

右右指よりくつくとトウとよみあひつらぬ

行いよつらふきとまゆらふやほすおち

あつとつらふらんかこころおのり

あつとつらふらんかこころおのり

又膳の孝を付けらぬ

世書

右膳

為氏朝臣

あつとつらふらんかこころおのり

右膳

指大納言を基

あつとつらふらんかこころおのり

右 為教朝臣

あつとつらふらんかこころおのり

あつとつらふらんかこころおのり

あつとつらふらんかこころおのり

世書

右

中納言為経

あつとつらふらんかこころおのり

右膳

信實朝臣

あつとつらふらんかこころおのり

あつとつらふらんかこころおのり

あつとつらふらんかこころおのり



我心よりよみいづきくらうのふんは侍れは侍  
と申し

世書

右侍

右近衛通成

郭よりよみいづきくらうのふんは侍れは侍

右

右近衛通成

八月の月よりしれ村あるはありしそなりはしよまこれ  
ちちもくしとたしをとおのえいしおしよにべら  
うよいし何者ふいぬし〜あうり〜しよとにちちわ  
らあり八月あるすきいしおありとわらわら  
たきいしとたしよぬおしよふし村あるは侍れ  
しよいし何者ふいぬし〜あうり〜しよとにちちわ

世書

右侍 小将内侍

ちりやちも初書より〜しよとにちちわ  
ちりやちも初書より〜しよとにちちわ  
ちりやちも初書より〜しよとにちちわ  
ちりやちも初書より〜しよとにちちわ

世書

右侍 經朝別長

ただたれおしよあてしよとにちちわ  
ただたれおしよあてしよとにちちわ  
ただたれおしよあてしよとにちちわ

右 沙汰禅信

名し〜あてしよあてしよとにちちわ  
名し〜あてしよあてしよとにちちわ  
名し〜あてしよあてしよとにちちわ  
名し〜あてしよあてしよとにちちわ



右少海より作らん

廿九番

左膳

越前

庭らち花よりなれり月夜よとを三つぬれや

右

指大納言為家

糸はるけく深時しわねふ月夜きけく都をぬ

しを三つぬれぬとの家んきくわくち高きた

竹もこしと月さきくけちむむん下白に丸のい

ゆるしよいさくゆるう小方御ちけくこい

まのうきしよゆるい左膳こちうPゆるぬ

平書 初秋風

左膳

女房

秋とよあさちとく木れ葉れきこちう風書し前め

右

小宰相

秋の葉に影さくし秋の吹風の身やむいあは秋もさ

たのくもを付よの葉の影をこし今ちう風の

きりこちやけりてゆるあとりけしすい初より

しくんくゆるに右吹風方けむ色小秋もさ

はこらいて秋の葉に影さくし秋の吹風の

葉の葉初風とてぬあさちりゆる人に借けれ

左のたわ膳

平書

左

左大臣

袖のよ小光乃るるしれかゆる秋もさちわと風をさ

右膳

後成御女

秋もさちわと秋の葉れじすいあはちう風書し前め







軍書

左膳

指大納言と基

いささし身しむ風乃吹きよきも礼なる秋のちなる

右

為教朝臣

うそぬらむし涼吹風乃月小なるすも秋やまぬらむ

右吹る小きくしゆるるすたけあらむ侍らにいと

右吹風のち小んさるる事事御よぶ廣安の御

おとすしと今わりのきりし侍れいたの勝

軍書

左持

中納言為経

吹風と涼くちりぬ之契れ天清んをくし秋やまぬらむ

右

信實朝臣

月小きしむ秋さきや〜秋原やうそふらむ風〜秋

秋のち〜めれ心身小きしと〜あまりも侍

かた〜涼風をさるとあろ〜侍らめし下向るよ

志〜わかか小きん侍らも天津みえ地秋や

ぬんさ侍侍する〜侍れ〜晴とま〜か〜

侍ら侍

軍書

左持

右軍總道成

秋乃系れ葉〜風のき〜花のよ〜秋はあ〜

右

右近中将雅光

秋のよ〜あ〜み〜れ〜し〜す〜と〜松〜こ〜み〜ぬ〜秋の初〜

た〜光〜す〜も〜あ〜た〜く〜さ〜は〜誰〜し〜侍〜ら〜は〜初〜の〜

〜し〜れ〜て〜し〜も〜あ〜ら〜ぬ〜と〜侍〜ら〜秋風〜の〜

〜色〜人〜の〜も〜あ〜ら〜ぬ〜と〜侍〜ら〜は〜初〜の〜



しんしんそくも膳りくゆりまきやわら

早七番

た

兵部卿有教

秋のつる秋をほげりしとせしりてききいふわらむ秋のど

右膳

弁内侍

くみ秋とて我ふとむらいつて実たる風乃身にしむらん

右をせしれ秋とつせよとら(きん)とちういふをくた

たて我ふとむらいつて実たる風乃身にしむらん

さいんんゆれと秋のと風乃身にしむらん

妖楚のすくふけをいさる膳

早八番

た

近中侍師述

行るて方りしものも吹風乃とともまに秋をすまはら

右膳

雅忠朝臣

吹風を葉のふとけりわとらぬと身しむるに秋をすま

たて同じし根のふとけりわと身しむるのどとゆら

かたしさととらぬとゆら

早九番

右膳

河津蓮性

天の川にうけ浄いふつてれるともゆり秋やまゆらん

た

下野

いに吹めふとぬ風乃秋の身あむとちれいてるらん

たをそりうとらぬとゆらゆらゆらゆらゆらゆら

たて同じし

早十番

右膳

為氏

たて同じし



うらたきまにまひる身もむ秋まぬといふさうりあ秋め

右 小將内侍

わふしと身小きむらをそあつらん春はあわめ秋の初風  
たよふとらるる秋乃と月をくちあわめ秋の初風は  
ホの腸負い身程れ事ゆめどらりつらんこころあ  
わまりにゆら又晴ゆくこころや

辛酉

右持 経朝朝卡

三ろきとれ水け草やかりいらん天の川原乃秋丸りつる

右 沙弥禅信

あゆみ入秋のころしとてれきり風吹のそ三瑞の秋む  
た下句とまひし波しよこのまはしとてあづえゆめ  
よ水原草むくむとせは付こころあわめ秋め

ゆらとまろきとてそもあれまじや草れいろ  
下やとにわつらるゆれと三瑞の秋村秋のころし  
るといさしやゆらとあまらとゆらと秋のまじ  
ゆらやん乃とらとや短あまらして弁かこく  
ゆら吹り系風の音しあまらとあまらゆれてゆれてあ  
お

右 越前

うけとら秋の夕れ秋の暮よと年えわいらるあ  
右 最指大納言為家

吹風もあさけ涼くぬきり秋ぬる秋れりに秋やまぬ  
たらめれ秋の心たはつらるやゆらよとあ  
わらよのうらふとまらとてきる事しゆれ  
腸負いのまらとてゆら



辛酉番 海邊月

左勝

女房

三つ浦の浦のまゆわしきとくはり月見守をいれあすの

右

小宰相

和舟に浦をりなるれの志はふ又こちめて月見守を

たふれとく浦の浦より華平朝に我人も六十余

玉の中も似る茶をこころをきつるふとねて

先つとくあわびき海をいともんて

ゆれ今の代までいそよこののゆれふせを

まじつとくおひつくとゆれとあつちとゆれくろ

道もかくゆれめときよのとくゆれをたれ

哥おわゆれけいといふこころをききす

月見ゆれねこころをいふこころをききす

辛酉番

右

左

太政大臣

昔よりよふられ浪のうまくに身も先と波月れ氣れ

右勝

後成卿女

三つ浦のよ見ゆれ神の秋の巻もくちれとす海

辛酉番 浪のながくはり身もゆれすもこころを

氣もこころをききす

神のゆれとくちれとす海

詞奴のすくはり直ゆれやふ人ありと

辛酉番 身をゆれとす海

辛酉番

左勝

指大綱言通忠

...



非波し海はきくるとなるうらむらむらそね秋の鏡

右 指大納言實雄

ひうらりやあらしれ浦の浪をいづるも秋の夜は月  
たわふ人うれ秋の夜海をいづるも秋の夜は月  
てよ海くくゆふ太明石れ浦れふれ行をいづるも  
うゆらそとて負ゆら

平書

右 指大納言定雅

うらり系えいひのいよん後日とらういづるも月小浪がれ  
右勝 指大納言公相  
うらり系えいひのいよん後日とらういづるも月小浪がれ  
たトウわらる風かんまういづるも月小浪がれ  
うらり系えいひのいよん後日とらういづるも月小浪がれ

あやのれらそいづるも月小浪がれ  
きし車こもわらる風かんまういづるも月小浪がれ  
うらり系えいひのいよん後日とらういづるも月小浪がれ

平書

右 指大納言公基

秋乃葉月よりんくうらりけあしれ浦よよするも

右勝 為教朝臣

まきり見えぬれ浦の名のうらりては秋の夜は月  
月よりんくうらりけあしれ浦よよするも  
あやのれらそいづるも月小浪がれ  
うらり系えいひのいよん後日とらういづるも月小浪がれ

平書



右

中納言為經

にほふにらもついなまき夜九月るれいんから明命流

右膳

信實朝臣

いさよしれあいのあーれいんから信實朝臣

たらとちあいのあーれいんから信實朝臣

ふ申侍つるあーれいんから信實朝臣

いさよしれあいのあーれいんから信實朝臣

こらんくつれ侍つる

辛丸書

左膳

右主簿道成

あしやふと井れうこれ秋の来りゆいんから

右

右内中将雅光

ん渡ん登鳴いんから浪まのちやまはるいんから

路邊海ゆららるいんからおとねいんから  
おとつる右今れあつらふあつらふ  
とふと井の浦東定いんからおのりけまてねいん  
やういんから方ゆれいんから左膳

辛番

右

兵部卿有教

いんから八平れあつらふいんから重んて月沈のぼるあつらふ

右膳

井内侍

いんからいんからいんからいんからいんから

た系気おのりいんからいんからいんから

たふありのいんからいんからいんから

いんからいんからいんからいんからいんから

辛番



右持

右近中将師連

あきつそ、北浦の海濱をめぐりて月をみるれば秋のまは

右

雅忠朝臣

白妙の神の宿ふは浪のふもくんとて月をよけさ  
秋のまは飛ちほくくねえかたていもあれてゆ  
こたかたと入ちやとくといもしてやうつわら祈  
はとらんしゆるんや

平書

右持

沙弥連性

海系やまを北浦のまきと北浦の月をのこしうら  
右 下野  
あけつし浦のくみしきまきしとまきし海をよけは  
うく舟のきまきすしはらるんまきまきしてゆるんや

平書

右

為氏朝臣

このまかいはま北浦まきしとまきしはらるん  
をうく舟のきまきすしはらるん秋のまきまきしはらるん  
右持 少将内侍  
秋をうく舟のまきまきしとまきしはらるん神の月を  
たるとくあけ井のまきまきしとまきしはらるん

平書

右持

恒朝朝臣

秋のまきまきしとまきしはらるん秋のまきまきしはらるん  
右 沙弥連性







右

倭成郷女

わがにまゝに流るる水とるるういとしめて言ふくさあはれあはれ  
守まはれ小なり家言ふるういて路ちる草木と花は  
心もなかくんく傳ふるも右のりには流るる水  
れこそいゆこ小きとまきすすなりあつられ  
又いれたか勝

卒書

左

指大納言通忠

からん乃とけの事とさうりあをいれあつら道言はりあつ  
右勝

指大納言實雄

さう言はれ右枝乃小枝をさうりあはれあはれ花咲き来り  
さうけゆ言しとさうりあをいれあつら道言はりあつ  
ゆりゆらん右枝の小枝とあつらとさうりあはれとさう

香もよとあはれぬ花の初々見はれは目とさうりあは

いやはゆこ右カ勝

卒九書

左

指大納言定雅

星白地とりん乃神さうり道しとああつ言はりあはれ  
右勝

指大納言公桐

守まはれういふ流るる水とるるういとしめて言ふくさあはれあはれ  
左言上りさうりあはれあつら道言はりあつ  
一ふ小なりさうりあはれあつら道言はりあつ  
祝すくさうりあはれあつら道言はりあつ

卒書

左勝

指大納言公基

裏はれあはれあつら道言はりあつら道言はりあつ



右 為教朝臣

かきくしき言ひ事ありいあやさう事乃しき言ひ事ひもあひ  
た言ひうとんはりりして侍らうふ言ひ事なりては  
はゆし来れりし言をこかりんといふはとほいんそ  
侍らん物と書えん乃侍らう言ひ事ひは侍らん物と書えん

平書

九持 中納言為經

いふれりし事ありのみ言ひ事なりて今とむしれあともいふ

右 信實朝臣

そのつしき事ありの事なりと書乃あはれ侍らん物と書えん  
侍らん物と書えん乃侍らう言ひ事ひは侍らん物と書えん  
侍らん物と書えん乃侍らう言ひ事ひは侍らん物と書えん  
侍らん物と書えん乃侍らう言ひ事ひは侍らん物と書えん

侍らん物と書えん

平書

右 右馬督通成

あひさういふの事ありと書乃あはれ侍らん物と書えん

右 右近侍雅光

侍らん物と書えん乃侍らう言ひ事ひは侍らん物と書えん  
侍らん物と書えん乃侍らう言ひ事ひは侍らん物と書えん  
侍らん物と書えん乃侍らう言ひ事ひは侍らん物と書えん  
侍らん物と書えん乃侍らう言ひ事ひは侍らん物と書えん

平書

右 長部卿有教

侍らん物と書えん乃侍らう言ひ事ひは侍らん物と書えん



うしと高栲野の高もみよけてあるがゆゑと雷は古道

右膳

弁内侍

幸か〜こもやういむ雷はう小野の高やん  
るとゆくはを雷れ古道を〜河〜すよ侍ゆ  
を合よやゆふよと〜か〜とよ〜の  
る〜小野とゆ〜上下おけて〜れん〜  
〜ゆ〜右膳〜

平書

右持

右近侍将師迷

右

雅忠朝臣

はかふ〜又〜野中〜松の志〜  
未有道〜は乃勸節の真左右若存命趣は誰〜  
頭む  
下持

是日野や秋乃あふり〜す及風白妙れ雷の下〜

右

前指大納言為家

あ〜ら原かれゆの小野の美れ〜  
皆白あり〜心〜  
〜及ゆ〜

平書 忍久恋

右持

女房

つれ〜とい〜  
〜

右

小宰相

今これぬん小春の年月の氣〜  
左近の心〜  
〜  
あ〜



れる心とゆふいしこあえはちきりたつあきなりや  
しうしうましくあふ小竹、今すう一巻もはく  
やうしうもはれ福のちつきり福のせは侍行、始而  
持のまよとちうらうらやゆらん

半番

左膳 太政大臣

このやきとぬおしむらぬの下釣あうらうらから

右 俊成卿女

袂試してくらふみみみ海とすしりみくらふを其を

たられぬ徳下釣水りいふこんくはらと羽やまふた

ひきりてふにふみは侍らありたをぬれぬは侍

ねこまのふに道りわも早あふぬれをさるとは

ひらちたのふにひききと侍らうらり守る負ゆれり

半番

左膳 沙弥蓮性

下とれの前なる市うらもささ海をい言れはつと家え

右 下野

本れ下はあやまらふ家本れえぬさちあぬ言乃あうとい

ろふさちあぬ言本の下あふまはつと事すす

あまにあうたしうらうらや侍らんしのや一葉

あふまあつとれ家言ん本にゆれむ九る膳

半番

左膳 為氏朝臣

まよのりとし法うらんく杯さく雷れあうらうらのまは侍

右 少将内侍

たよらうといく野の道とてすすいあまもすすじら雷れ







九月廿二日 九月廿三日 九月廿四日 九月廿五日 九月廿六日 九月廿七日 九月廿八日 九月廿九日 十月一日 十月二日 十月三日 十月四日 十月五日 十月六日 十月七日 十月八日 十月九日 十月十日 十月十一日 十月十二日 十月十三日 十月十四日 十月十五日 十月十六日 十月十七日 十月十八日 十月十九日 十月二十日 十月二十一日 十月二十二日 十月二十三日 十月二十四日 十月二十五日 十月二十六日 十月二十七日 十月二十八日 十月二十九日 十月三十日 十一月一日 十一月二日 十一月三日 十一月四日 十一月五日 十一月六日 十一月七日 十一月八日 十一月九日 十一月十日 十一月十一日 十一月十二日 十一月十三日 十一月十四日 十一月十五日 十一月十六日 十一月十七日 十一月十八日 十一月十九日 十一月二十日 十一月二十一日 十一月二十二日 十一月二十三日 十一月二十四日 十一月二十五日 十一月二十六日 十一月二十七日 十一月二十八日 十一月二十九日 十一月三十日 十二月一日 十二月二日 十二月三日 十二月四日 十二月五日 十二月六日 十二月七日 十二月八日 十二月九日 十二月十日 十二月十一日 十二月十二日 十二月十三日 十二月十四日 十二月十五日 十二月十六日 十二月十七日 十二月十八日 十二月十九日 十二月二十日 十二月二十一日 十二月二十二日 十二月二十三日 十二月二十四日 十二月二十五日 十二月二十六日 十二月二十七日 十二月二十八日 十二月二十九日 十二月三十日

全番

全番九

指大納言云奉

あまのひのちにておひまぬるふと共にておれぬん

右

為教朝臣

水底ふるくもまじり年成へくむいみふあも今もまじ

右下白とてうさまともやうくはんたむとな

いぶまいぬいふかゆあや

全番

全番九

中納言朝臣

あまのひまんのぬれまきいふいそむいの年しふけふ

右勝

信實朝臣

月也と今といひておれともぬそとも恋れ老とあかん

たよりをねはつるもゆふもやまといしすういん

をゆふや衣月也と今といひておれともぬそとも

恋の光とあかんをみすういんゆふまといしすういん

全番

右

右兼光朝臣

あまのひのちにておひまぬるふと共にておれぬん

右勝

右近将雅光

あまのひのちにておひまぬるふと共にておれぬん

たよりをねはつるもゆふもやまといしすういん

をゆふや衣月也と今といひておれともぬそとも

恋の光とあかんをみすういんゆふまといしすういん

あまのひのちにておひまぬるふと共にておれぬん



侍人 躬勝 平 侍

半番

右持

兵部卿有教

我らぬまのめふれね乃景も子て色い川はよを

右

弁内侍

おふといそ心乃うちふのこは月見ねを人のちま

た我らぬまのめふれね乃景も子て色い川はよを

いらまていついそ心乃うちふのこは月見ねを人のちま

侍れよ手持とよりんし侍れ

侍れよ手持とよりんし侍れ

半番

右

右近中将師繼

今これおれいさわけて朽祢もや袖小年るる我らぬまのめ

右

雅忠朝臣

いそに年とち野乃をいそに年とち野乃をいそに年とち野乃を

た小藤系ももるる物しんし祢ぬしや秋の侍れ

さ自家要いしやた折祢もや侍らう心ゆぬや

侍れと袖小年ち我後いそに年とち野乃をいそに年とち野乃を

か勝もや平侍らま

半番

右

沙弥蓮性

吾かの祢乃と平むしむふと下いしりちやあひん年

右膳

下野

恋とのこいひのやわれもは遠きまのまのいそに年とち野乃を

たの下むしむいふむさよ小祢むし入て侍らあや

後れ朝臣もあわりのせされ侍れもものつさま



山河乃下りありの下のい

牛馬

九

為氏朝臣

いそねむしはくさくまのしる年月はきこのよまのいふ命

右膳

右将内侍

なふし神のむしにららそぬ我らうさよなるさ

牛馬

きこのよまのいといさ整ふんくつらと神の昔にら

いそぬ我らうさくよ流らすれ歌のいぬく西歌

九牛馬

右

近朝朝臣

山河乃下りありの下のいこのこととくろきそ祢年をあらは

右膳

沙弥神信

秋とてあき初めの悲草まのいさのいぐせぬ祢年

牛馬

た山川乃下りありの下のいこのこととくろきそ祢年をあらは

らしてつら川のあつ下りといさのいぐせぬ祢年

たそぬ我らうさくよ流らすれ歌のいぬく西歌

いそぬ我らうさくよ流らすれ歌のいぬく西歌

牛馬

右膳

致前

古郷のまのい乃高し色不出ぬのいさのいぐせぬ祢年

右

前持大納言為家

いそねむしはくさくまのしる年月はきこのよまのいふ命

なふし神のむしにららそぬ我らうさよなるさ

きこのよまのいといさ整ふんくつらと神の昔にら



九尾書 逢不遇恋

九尾

女房

はらへるまゝのあはれおふさわりしむもはらへるまゝのあはれ

石

小宰相

下れおののあはれむきひし申されはたすかきしは

九尾とともひ鳥のあはれまゝのあはれおとるはらへるまゝ

多くはらへるまゝのあはれおとるはらへるまゝのあはれ

おねお直しとはれお下れおののあはれむきひし

うしとともひ鳥のあはれまゝのあはれおとるはらへるまゝ

こしとともひ鳥のあはれまゝのあはれおとるはらへるまゝ

の卒之はらへるまゝのあはれ

九尾書

九尾とともひ鳥のあはれまゝのあはれおとるはらへるまゝ

太政大臣

身と浦乃海丸とてかよふりまはらへるまゝのあはれ

石脂

後成卿女

まけと夜のあはれまゝのあはれおとるはらへるまゝのあはれ

九尾とともひ鳥のあはれまゝのあはれおとるはらへるまゝ

はらへるまゝのあはれおとるはらへるまゝのあはれ

ゆいよのあはれおとるはらへるまゝのあはれ

九尾書

九尾とともひ鳥のあはれまゝのあはれおとるはらへるまゝ

およりまゝのあはれおとるはらへるまゝのあはれ

石脂

権大納言實雄

およりまゝのあはれおとるはらへるまゝのあはれ

たよりまゝのあはれおとるはらへるまゝのあはれ

およりまゝのあはれおとるはらへるまゝのあはれ







九 志未の若道成

い海に身をかく祢の袖もさうのつとこもいふくらにのひらくらも

右膳 右近中将雅光

うしそしうし見いさうの糸なるはつとよりおれあは  
九神のういさうもとねはゆくと座の枕ねわた蓮  
るこもきて心乃うらうらものるもねはつとさゆり  
ちういともなまうしを又あひをるやこゆらさゆらこ  
むきあしもいふゆと祢たの膳

九九番

九持 兵部卿有教

そのめとこし我身やあぬえたりと今一度といそこは

右 弁内侍

まこりともいふつとねをわすれやそとぬあめつりわ

百番 九 右道雅卿おりのちとちる身れ心傳小ゆれともい  
さくゆらとやちやくともらりてのといさまかとい  
てまに心約あまことい同一に記してカ持

九 右近中将雅光

えつとちいひふきいぬ今くらうそのおうううし

右膳 雅忠

えつとちいひふきいぬ今くらうそのおうううし  
九心わくゆら小下向う我身とらうんぬあとい  
さくちやくいゆら右近あまも橋のこらわらとゆら  
ゆれとつとま傳ちがすうゆれまを伝とまに

百番

九膳 沙弥蓮性



きあのまゝもいぬいにちりふもけりよまらうやんかゝるは

百番

下野

おもろき人しあまれいほつて月を夜もきしは  
たこぬいひちりよるまゝとよふしゆくはちた  
もつたを夜もきしはとよふしゆくはちた  
きとこいふは夜もきしはとよふしゆくはちた

百番

丸膳

為成朝臣

ありしはち家うけいひあふに後ふまゝやまといは

百番

少将内侍

差いさよいほをんゆとみしと志新いふそあゆられ  
日受たぬつとく見物侍々やわ膳

百番

丸

経朝朝臣

あつさきるいひ乃ちれ社をまゝいひてあちまらりや  
石 沙汰禰信

おろしきやち枕ぬけあゝぬとくまゝしてとよひんお

石上りよあゆむくはち八鼓た鳥の音やこいきいぬ  
いふ心たはつるまゝやあこしとよふんをまゝきしやあ  
と一葉あひさるよりてむの心をあつたあはちや  
石枕少の胡祢ぬも他有れ西新いふといはははは

百番

腸切

百番

丸膳

越前

よゝの肩たあけり清の恨ふむいあつてとよふしゆくは

石

前指大納言為家



我らうり公あふたかこまうもりいさやわたりいあをえ  
たの今れせまうわりいつさうし結ん恋しきま  
おまうし口もさうさうし結ん恋しきま  
けられおれい又肩のたう

百番 旅宿嵐

左持

女房

松の枝乃枝さうゆきさうし結ん恋しきま

右持

小宰相

いかにちるぬ嵐も何両あん故とさうゆきさうし結ん恋しきま

右の道れおの志さうし結ん恋しきま

枕あられぬ嵐も又あられぬ嵐も又あられぬ嵐も

まうたうあひまうし結ん恋しきま

百番 いふわらうあふんさうし結ん恋しきま

よあしうし結ん恋しきま

百番

左持

太政大臣

嵐そんれく皮さうし結ん恋しきま

右持

後成卿女

あまさうし結ん恋しきま

嵐こしあられぬ嵐も又あられぬ嵐も

猿のいさうし結ん恋しきま

あまらうし結ん恋しきま

あまらうし結ん恋しきま

百番

右持

権納言通忠

あまらうし結ん恋しきま



右

権納言實雄

幾良成つこもいぬ旅衣のよしののんぬあこし  
右の海と難くはゆなま今よりあるくも旅のんぬあを  
まがたふるまふた戸をゆるとも舟の結文やか  
くおれさるる舟のゆるといぬも舟のゆるといぬ  
と旅衣のよしののんぬあをゆるといぬのゆるといぬ  
くお勝

百八番

左

権納言定雅

舟花のよしののんぬあをゆるといぬのゆるといぬ  
右勝  
権納言公相  
舟花のよしののんぬあをゆるといぬのゆるといぬ  
いたのまもあゆのゆるといぬのゆるといぬのゆるといぬ

百九番

左

権納言公基

舟花のよしののんぬあをゆるといぬのゆるといぬ  
右  
為教朝臣  
舟花のよしののんぬあをゆるといぬのゆるといぬ

百十番

左勝

権納言公経

舟花のよしののんぬあをゆるといぬのゆるといぬ  
右  
信實朝臣







百七番

左膳

右道中將師進

いふら花れ尻小巻もむきしむり身たるをうり花を枕

右

雅忠朝臣

草枕祢光の床れさむいさもふとふりすまきりあく尻を

尻さめりとししてさむ月影やゆらん尻小巻

い草れ枕あしすふ心さしゆん古あまうりほやま

くし暗燭のすれと中へやゆらんわ扇

百七番

左膳

沙弥蓮性

若う祢の枕れ尻ニ元うりてきくい祢そるをうりてあせ

右

下野

ゆい言て一葉やわかぬねふるあわめは床をうりて

左方と下句り先の回文をうんとむらむりしゆれん

い祢そるをうりてあせよはしゆりく回文を

ゆんはゆりや右何と尻のこいふんよ今ゆニ元ふを

左方膳

百七番

左持

為成朝臣

うらうけそ祢られやいふ尻草枕むきよは祢の尻あ

右

少将内侍

却るふか後になつらんかり子解ふはねあうりし

左の草枕をすすよは海ふうらうけて祢られぬを

かこらたのりり祢か人あふりふらなはんでん

まわりつるやと老んちうたあはれいんねのあうり

かこらたのりり祢か人あふりふらなはんでん



早番

左膳

経朝胡片

右郷小かよふまは乃言とり後祢おとろくわさるきり

右

沙弥禅信

気吹く流るるの昔枕ひよと後祢のまゐるすくすく

左膳のおとろくすさるありし中まの侍ねし志む

す物積のれなるうすくろき又見る侍侍上は嵐

吹か流るるさるういふこれわさる侍も雲書刀

ありさる侍れし膳侍家つきよや

百七番

左膳

越前

らんしすきかり祢の野へふくくまを月と嵐と教あき

右

前指大綱言の象

草木あそむ山風さうくくさるびろきしい祢れ神さる

左膳あそむ山風の侍れし左膳

早番 社以祝

左膳

女房

我末乃きすすすすすすすすすすすすすすすすすす

右

小宰相

若清水なして清き我々あはれ意の心ふらげもあせよ

あつさき綱をあらるる心とりもりかやし事

侍りぬるさきとあてたりあはれはく侍れしと心

にきとむりの侍事む祢ふくく侍るあはれは

かりとむれ侍る下木はよきやうとあはれは

あはれ心よりせてせれとくわあはれ侍る

さうかいて志れすすすすすすすすすすすすす







月

權大納言定雅

神垣の宇をわく風のときあしとありうみあるせあ先

右膳

兼大納言公相

あつ代をいの家心のさるあわくくちきかもぬかひ

右左衛門兼大納言世もまことに祝小侍公社次のをい

復こころよくよきゆかつくるととききし秋よあまこい

高下内侍とあせもゆるんやすきをい

しつらあま心とめくさるまはれのこふま

よいぬのひくくもやとるぬきをゆりしあのみ

とるよこしはさむれい膳の定す

左持

権大納言公基

ねるゆれ家津代ろくすみよれ松吹風の音あ

右

為教朝臣

しりてあま三のころ朝の氣りりあせう久くき

右志あし神膳貞雄一史可持歎

左持

中納言為経

あま神いそぐれ川の宮ねうとあ津代ろくめあ

右

信實朝臣

あまあしあまれ川の宮ね百きといちあまそさ

左下向ともなきのそくゆきをあし川宮いあ

あまあて百度らあまもねりあま下ゆれは

あま乃いこふ小神意小けゆんを可持







一 石太内石清水山移子ひつひとてさる若くして  
成家久よん心成大物。ゆきひた力持

百葉書

丸

為成朝長

色はぬきとていふはひきくねくねとてはるる

太

少将口侍

非凡やる平路はれきしりてきよはるる金持代をく

たきくねり家半とつららりてしりてゆきや太甘の

あふ川をよこせりてゆきつるえききしりて

あふ川をよこせりてゆきつるえききしりて

あふ川をよこせりてゆきつるえききしりて

百葉書

丸

経朝の下

任者れねりあつらんきりてきよはるるねりねり

太勝

沙弥禪信

きよはるるしなれきしききききききききききき

たかききききききききききききききききき

たかききききききききききききききききき

たかききききききききききききききききき

百葉書

丸

越前

ねりねりねりねりねりねりねりねりねりねり

太

宗持大判言考家

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ



乃心なかりしゆりまに日事のせしむゆき言は  
しむらういん麻巾しあきあつら心社神心いん川  
さし。社れ初受いんいんゆりし書はしん

社感をとてしこの持しゆりゆりあふ  
抑二代撰者乃あういんを持て正判若れ名をまがゆり  
まのさうのれいせいもあはれはまにふくあまういん  
あういんゆりゆりし道りつてわさくえゆりまうに  
あういんゆりあういんまうにまうあふとあういんまうに  
とあういんゆりあういんゆりあういんゆりあういんゆり  
筆しゆりあういんゆりあういんゆりあういんゆりあういんゆり  
心なかりしゆりまに日事のせしむゆき言はしむらういん麻巾しあきあつら心社神心いん川  
さし。社れ初受いんいんゆりし書はしん

ゆりまに日事のせしむゆき言はしむらういん麻巾しあきあつら心社神心いん川  
さし。社れ初受いんいんゆりし書はしん

女房	勝九	持一	小宰相
大政大臣	勝四	頁三	後成卿女
道忠	勝二	頁六	安貞雄御
定雅卿	勝一	頁七	公相卿
公基卿	勝四	頁四	為教朝臣
厚理卿	勝四	頁四	信實朝臣
通成卿	勝四	頁二	雅光朝臣







おとそは小野乃野廟定てはひの事あつたはらあつた  
信ぞうりは但方宗おははに朝と日なるをいふ事もは  
まはふつては非下されゆりんのるく可きふつと力集集  
乃久まつつての巻こといふをわたりまはらまはら  
と武をまきとあてはれはなもを武のまきとりてそを  
揮一ちりあつてはあつてそを運下はる事ひてそを  
件集の漢字につきては非あつては非あつては非あつ  
るとは詞を鶴鴨の字をさしてふんといふをさして  
はてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつて  
漢字れはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
やうすははあつてはつてはつてはつてはつてはつて  
らとすまら達保内裏はつてはつてはつてはつてはつ  
しつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ

定家御判ふはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
はつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
下つてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
用はつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
まはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
別はつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
何のあつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
おはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
かくはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
こまはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
まはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
ふちあつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ  
あつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつてはつ







正花子の野のわくはとに山ありと山ありと  
谷地乃わくこよるんてかあきなりと前達れくか  
秘事は傳ふて申し秘事の中少し定家郷と  
申す事しほては天家比儀のきくといふあり  
胡字九部といふとみんとして可詠ある末座  
物かまふ事とみんとして可詠ある末座より  
教訓の類に賢具に父のしねとありありと  
いふとも或可合小治山花

此も一本末座ん家...  
判之れ故奉旨何と云を一樹と指若く  
又世三子と申し事なき詠を申し花可詠哉  
判ふぬはいといふ今夜を詠傳へて詠と  
海邊月

花子のそあきりえ...  
判云たえりは浪の月...  
海のかかりありてや海鳥よ...  
流授りて...  
すんさにと...  
とや判初ふぬ...  
は...  
後成知...

志村より...  
か...  
...  
...  
...



ゆわきるとこを海をえりもちる波湖とくくつと判  
せふ家とてしゆたかやうにわらわはらんこも一方にばきいて  
ゆをしましたるやこぞい給海を月書をきぬく恩詠の  
賜よをゆるねた奇なりともこくすたてしね今きき  
申あき山判のこくはてゆを浦おくまわりをい海に  
志賀八浦のおもぬけも道ぬくもすましゆふん受る  
てこつかりしそこつち雅とをいこたられゆいこち  
一節云恩詠雅にゆきぬがとをいふまふたもやゆら  
こゆやをいむいたれてゆ但るを序をいしゆを  
こもこもいゆわらゆ今もまの奇きこちゆたれ  
ゆをば奇合い

後成卿女 逢木舎恋

つげしゆらきりもさそくをいふたぬた芝居

こもれてゆちろこもさ  
こふたやうにゆらゆら  
やゆら事しゆらゆら  
ゆををちさしゆらゆら  
をぬやこんたよりせら  
月あれかりかりな  
行政家も首首首

み月あゆらこもを  
心細いともか  
たふらさあゆら  
秋いふ時雨の  
定家卿判云  
りをれをとい







家隆卿

成實卿

そらねく人やうはまを思はせむをいふは  
かやむら後の流れをうまうまにう流るわらめてこい思  
い寄合よ連社とこい思ふにうまうまにう流るわらめてこい思  
こころ又まふ方な

言へるは中ありしを思はせむや月をう流るわらめてこい思  
いころを思はせむや月をう流るわらめてこい思  
かやむら後の流れをうまうまにう流るわらめてこい思  
これをやこころを思はせむや月をう流るわらめてこい思  
に思ふしこころ判そし思はせむや月をう流るわらめてこい思  
あふの思ふしこころ判そし思はせむや月をう流るわらめてこい思  
かやむら後の流れをうまうまにう流るわらめてこい思

本れ下風ののこ泳てう安なゆいさんかやうは流れを思ふ今  
れうなふれは思ふ人の事とてうまうまにう流るわらめてこい思  
りし今判者指こすこころを思はせむや月をう流るわらめてこい思  
虫のこころ思はせむや月をう流るわらめてこい思  
こころを思はせむや月をう流るわらめてこい思  
は身れ不覚を思はせむや月をう流るわらめてこい思  
は思ふ事とてうまうまにう流るわらめてこい思  
思ふ事とてうまうまにう流るわらめてこい思  
判を思はせむや月をう流るわらめてこい思  
月の奇に思ふ事とてうまうまにう流るわらめてこい思  
思ふ事とてうまうまにう流るわらめてこい思  
は思ふ事とてうまうまにう流るわらめてこい思  
連性あるにのこ思はせむや月をう流るわらめてこい思







Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. The script is dense and fills most of the page, with some lines appearing to be part of a list or a series of entries. The handwriting is somewhat difficult to decipher due to its cursive nature and the fading of the ink over time. The text appears to be organized into several lines, with some lines starting with what might be initials or specific identifiers. The overall appearance is that of an old, well-used manuscript.



一昔春

昔年秋

憶昔年

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋

昔年秋



水戸瀨殿息十五首評合

建仁廿三年  
九月十三夜

題

- 春息 夏息 秋息 冬息 曉息
- 暮息 靜中息 山家息 故郷息 旅宿息
- 園路息 海邊息 河邊息 岸柳息 岸風息

作者

左馬頭藤原親定

左大臣

前持僧正益國

持中御三藤原之継

俊成子女

女房室内女

一番 春息

左 勝

左大臣

當此不修かきしむけはるを成りし神むとてはつ

三 右

俊成子女

おろしきおのめ月やわらわける春や昔の神のふりて

左 平少成よりとてくもといつるもいりたなり

うらうら大平より月やあらねおといつる平のふり

うらう春やわじくは神のふりてといつるトは白

くもいりふりてかきと一番の左よりくもいり

くもいり持ふくもいり定よりまきくもいり

くもいり此左は神の侍り仍為勝











九番

左 晴

右 大 左

草少くよ夏野とひりまきまき音成りたるは露がるる

大

家隆朝臣

時をまわすもの愛をかしこく人への下のあはれ

大

いづるふを宗身よりるも也左平よりくもるすの晴

十番

左 晴

前持僧正

夢したにふかきほそわの夏衣かつとすいあくるのめ

大

定家朝臣

時鳥そらくつるよえい徳くもるやふ月のあめり

左 久とくすいあくるまのめまもくくおしく

思く侍ると大をくほくもい徳くもる

みりかといつるふをつよわいから侍るや

とくいものよめく室や侍るんと侍るハ

侍るよりあつるよく侍るく

十一番 秋意

左

親定

くやまのあめね宿の度おるもらふひ秋の夕風

大

前持僧正

野合の露はしらすかてやえいづの神よりもる花をるを

左 平いふくは山のこころがわらふといふ古平と思ふ

右 平いふくは山のこころがわらふといふ古平と思ふ



侍りし大勝しつ

十二番

大

片中納言の継

我んいづくかきふららぬとて秋の日は此つよあを

大 勝

定家朝臣

さもいづれ月やあめあまもささけ秋のちかむと人北つしな

十三番

大

勝

俊成つ女

鳴りつる雲井の鷹は波の露は神のよもみ

大

雅經

渾しやんけくは秋の月露のかし神のきこり

大平の露のかし神のよもみささけいつるやうよ

後し侍りしはゆとく神のよもみささけよ猶ら

きこりしはゆとく

十四番

大

左大臣

さく神の波のいりやまもささけは秋の月の露

大 勝

有家朝臣

物おぼしたるまもささけ露はたのむるはわさけ秋の波と

左平からしりささけ秋の月の露はささけ

さく侍りしは猶大のむささけわささけささけ

ささけしはゆとく

十五番



十九番

宮内

物おしふともいひすまふもはたけたりおかしははる感も

左 勝

家隆朝ん

もしいふ力はは草の状は露とあめりまてあめりは

の 左手はふもあめりもといつるふくくもあめり

の 太平たのめりまてあめりははる

の 下さしく侍つ

十六番 冬冬

式

十七番

左大庄

わかしはるふはるふも霜の消くつていひくもあめり

左

雅經

霜くつてあめり中みら中くつてはるふもあめり

の 太平かえりもあめりもあめりもあめりもあめりも

の やまのやまの侍はるは秋風のくもあめりも

の おつてあめりも侍はるは太平

十七番

左 勝

宮内

とらつてあめりのあめりもあめりもあめりもあめりも

十八番

右家朝ん

あめりもあめりもあめりもあめりもあめりもあめりも

の 左平決の子はあめりもあめりもあめりもあめりも

の お後かたはあめりもあめりもあめりもあめりも

の あめりもあめりもあめりもあめりもあめりもあめりも

の あめりもあめりもあめりもあめりもあめりもあめりも



しつづるゆりのうららかに他者ハヤクハ金よん

十六番

左 勝

親定

うつりけ離れぬ菊のちりくふんくはの杖とくうえ

大

片中知言公絶

冬の夜といくまもくらげをすまじりもくもくういひ

と左平よりうらよ娘也大平よりあかりよ宿のいよ

とくらくやうくといつる平は上句勿論なり

十九番

左 帰

前片伸云

徒も千鳥鳴るるけはしかりか涙してけりるをさすよ

大

家隆朝見

をばれすりの涙のよ白雪はうえたてし山ありみよ

と左平ト句くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

大のよ白雪といつる平は上句勿論なり

二十番

左 勝

後成ツ女

かむい一宿のそらくは枯くは跡がよ霜のじすくくく

大

定家朝見

床をくし枕は泣きさへもいじりもかみんをさすよ

廿一番 曉息

廿二左

家隆朝見

と平はすよ今いさふんほくくくく山峯のあらくく有明の月

泣くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



こたもくしんりくふ後かみ揃案のあらう

女二番

女一左 勝

親定

白雲のこぼるるに宛よ別しとあふるるに有明の月

女一太

有家朝臣

またんといひく別り名残のこぼるるに有明の月

女一太 左太とし時世猪雑左柳まゝとくもや

女三番

女一左 勝

前僧正

たまたまの夜半しひはる油の雨月まゝる有明の月

女一太

佐成公女

かみくさるるにわらわねくよと形見の腰掛

女一左 左平月まゝるもつといつとくもや

女一左

今ハまゝとせとくもや浮金かまいたくもや

女一太 勝 定家朝臣

女一太 勝

定家朝臣

面影も待夜しるよ別しとあふるるに有明の月

女一太 形原の腰掛もつとくもや

女一太 女一左 女一太 女一左 女一太 女一左

女一太 女一左 女一太 女一左 女一太 女一左

女一太 女一左 女一太 女一左 女一太 女一左

女一太 女一左 女一太 女一左 女一太 女一左



廿五番

左 勝

左大臣

わらわのくし水の白玉いはとてたれしむるを神のふ

大

片申御言の継

いづるも成るし恨じとあふとの名強し今とをわつし物成

西の海水の思く曉のいそがしむる大なる法

廿六番 暮を

左 勝

親定

いよせえぬ夜あしむ神の露し月夜のまよひ夕暮のそ

廿七番

定家朝臣

泳つてまよはし思ふ雲のいろとまよ夕暮をまたのしら

た平月ひの待るといつるもよる願ふよそぬ

思ふ大平雲かとうとくしむる待るも

三十二番 左 実内

廿七番

左

実内

今とをまよるひはらむる雲のいろとまよ夕暮のそ

大 勝 雅經

あらしのそとくしむる雲のいろとまよ夕暮のそ

廿八番 左 大 勝

廿八番

左 勝

左大臣

なまぬと思ふいれ夕(たよ待出)物成山の端は月

大 前侍僧







其 左平久保なるやふらとくつる平とよあつてふらとくつる  
ふらとくつるやふらとくつる平とよあつてふらとくつる  
ひらたけらりふらとくつる

三十三番

右 勝

親定

君とくつるやふらとくつる平とよあつてふらとくつる  
左大臣

ふらとくつるやふらとくつる平とよあつてふらとくつる  
左大臣

侍らん左降世指直末娘がふらとくつる  
侍らん左降世指直末娘がふらとくつる

三十四番

左

侍中御言繼

ふらとくつるやふらとくつる平とよあつてふらとくつる  
左大臣

三十五番

侍らん左降世指直末娘がふらとくつる  
侍らん左降世指直末娘がふらとくつる

侍らん左降世指直末娘がふらとくつる  
侍らん左降世指直末娘がふらとくつる

三十六番

右 勝

前持僧正

侍らん左降世指直末娘がふらとくつる  
侍らん左降世指直末娘がふらとくつる

左大臣

侍らん左降世指直末娘がふらとくつる  
侍らん左降世指直末娘がふらとくつる

侍らん左降世指直末娘がふらとくつる  
侍らん左降世指直末娘がふらとくつる

侍らん左降世指直末娘がふらとくつる  
侍らん左降世指直末娘がふらとくつる

三十七番 山家直



三十九 左

後成の女

くまねのたよりをいふに山はまのいんまの徳風のた

大

山陰朝臣

忘るくめはいつたはよるうつし山里の冬とるる

左平でさうふ様あり太平人めし草すもいつ

わし平をまはばやまはわれとふくすのらん

廿七番

三十九 左 勝

左大臣

下よりいのおまはさなむがはみはるくはまよ

大

山陰朝臣

風をよらむあつた山はまのいんまの徳風のた

太平あつたよりくまねのいんまの徳風のた

あつたはまのいんまの徳風のた

ありたむか勝

廿八番

三十九 左 勝

親定

あつたはまのいんまの徳風のた

大

山陰朝臣

思ひ候波よりくまねの徳風のた

太平の徳風のた

すかのくまねのいんまの徳風のた

らんぬれとくまねのいんまの徳風のた

わし平をまはばやまはわれとふくすのらん

あつたはまのいんまの徳風のた



廿九番

左 勝

前持僧云

つよがじや山鳥共あかふ夜はしんいしつわがもあしつ

右

雅經

みろろやおしよあしつ夜はしんいしつわがもあしつ

右

大平兼及よこ

卅十番

左 持

持中御言公能

いしつあしつよあしつ夜はしんいしつわがもあしつ

右

宮内心

わがもあしつよあしつ夜はしんいしつわがもあしつ

左平山家在大平を平る首有定朝の平夫有唯す方持

卅十一番 昔の在

左 勝

親定

里はわれわいのふらふらよあしつ夜はしんいしつわがもあしつ

右

左大平

まろくとりあしつよあしつ夜はしんいしつわがもあしつ

左平がのふらふらのよあしつ夜はしんいしつわがもあしつ

右ふらふら大平を平る首有定朝の平夫有唯す方持

卅十二番

左 持

右定朝心

あしつあしつよあしつ夜はしんいしつわがもあしつ

右

定隆朝心

いしつあしつよあしつ夜はしんいしつわがもあしつ



太平方の里の油とねらふねやうとんく侍り左平  
くもせ侍り持しや

口十三番

左 持

前持僧正

いりえよ油とくらの里はふくまがくらの油の思ひと

大

條成女

よふらねあそめいしはねいさうしんかきつんせせ

大

太平とよののといつるあそり侍りなきもあそり

此下持

口十四番

左

左中細言の継

ほつよの康もなれはよのよの國に決りいさうしん

口十五番

宮内

らふらうしあそりあそり西船ありふらうのしん

たわらうしあそりのしんあそりいさうしん

侍りもたよいさうしんあそり

口十五番

左 持

室家勅

はがよのしんあそりのしんあそりあそり

大

雅經

人あそりあそりあそりあそりあそりあそり

左平まむねくしめこの他者此漢師といふあそり

あそりあそりあそりあそりあそりあそり

あそりあそりあそりあそりあそりあそり



これいづれもあまのこゝろにあらはれし古事よ侍れ  
初めは文字もいづれもいづれもいづれもいづれも  
持てて

四十六番

四十七番

おた

ちりめ

た

た

た

た

四十八番

親定

男よんとうふの夢みふるとけさしたもとののくと西乾

た

布家勅

思ひ流の萬路よんとうふの夢みふるとけさしたもとののくと西乾

左たかよおろしけりありとた平人すし

らりの年の年とうくとつる様く回わ左勝

四十九番

左たかよおろしけりありとた平人すし

少後さしむしめけのいとほの風きり夢路のさしむしめけ

た

家隆勅

うおはらみよなまきく神のく月をたあさるすし西け

た平人とうふの夢みふるとけさしたもとののくと西乾



うしはらふもきりくわさぬるちたし古平の侍に  
初の丸文字をいぶよへよ後よるりはつ  
持

口十六番

左 侍

後成の女

お思ふにほしきしりまふわーの萩はりよなる物り

大

宮内

いしほくしといまも曙よふはるかき月夜かろわ

たこまの同宿さもいもいふのよわーや

きしきまらふよとんく侍れとわらたらは

いしわらん持

口十八番

左 侍

親定

思ふにふしの夢よみふとけさしたもとのしと西光

大

有家朝長

思ひしの夢路よんともくかきむれもあふよなるあけり

左たきよなるし許さると大平人すし

らりの年の年とくつる様し回わ左勝

口十九番

左

前持僧正

少娘とむしあけのいもほの風ちる夢路よもるかよえ

大

家隆朝長

りみはかみくたきく御のふ月夜かきわらすし西光

大平人すしは實よ儀し大平人



五十番

左 勝

左 大 左

まじりもあめあめいさあから使じいあけのふらまはね  
うら

雅經

かろよの油しうぶはのかは使ひしりあしはうらあしのかや

た平サ持書まひしりあしはうらあしのかや

五十一番 南路通

左

前持伸心

わは路やひしりあめあめいさあから使じいあけのふらまはね

大

待中細言と継

いそいそくさあかえし南守しはげささあめあめいさあから使じいあけのふらまはね

左平サ持難けささあめあめいさあから使じいあけのふらまはね

五十二番

左

家隆朝長

あつらふしあめあめいさあから使じいあけのふらまはね

大 勝

雅經

あつらふしあめあめいさあから使じいあけのふらまはね

五十三番

左 勝

後及女

逢坂のゆつていしあめあめいさあから使じいあけのふらまはね

大

宮内

あつらふしあめあめいさあから使じいあけのふらまはね

左平サ持書まひしりあめあめいさあから使じいあけのふらまはね



五十に番

左 勝

左大長

つらねやのむねせよと鈴鹿汗くく油のふに月しけ

大

有定朝長

こしりよと開りりこしは清とかくまをくわ油は波ま月しけ

五十 大平より白しむくくよ様うり左平政らくよ

五十 万ふりりいれも勝く

五十五番

左 勝

親定

左とれと漢人の開をねねひくしゆと油と油はくく

大

定家朝長

漢人捕浦の浪もりしきまいて開ふくゆはくく

五十 大より取りサ持難左りよもくく

五十六番 海辺定

五十九番 勝

親定

いふせん魚むのりよのまはくく清く浪よく

大

実内

おもととくいせおのあまく宿のくえおふく油はくく

五十 大平よりくくくくくくくくくく左平のく

五十七番

左

佐加女

らぶらりて我がむくくくくくくくくくく

大 勝

有定朝長

はつたにむねの海士のねれなねれ



左平... 大平... 勝つよ...

五十八番

左 勝

左大長

左平... 大平... 勝つよ...

大

雅經

左平... 大平... 勝つよ...

左平... 大平... 勝つよ...

五十九番

左 勝

左大長

左大長

左平... 大平... 勝つよ...

左平... 大平... 勝つよ...

左平... 大平... 勝つよ...

左平... 大平... 勝つよ...

六十番

左 勝

左大長

左平... 大平... 勝つよ...

左平... 大平... 勝つよ...

左平... 大平... 勝つよ...

左平... 大平... 勝つよ...

左平... 大平... 勝つよ...

六十一番 河辺玄



六十九 勝

九十九

初瀬江いでし浪のいほはうたのれたじく人そほしるん

五十九

定家朝長

名くうけはれうらうらうらう神のちあはれむせのいほれあ

六十一番 大平いでし浪のいほはうたのれたじく人そほしるん

かろかなまけのいほれあはれむせのいほれあ

六十二番

左 勝

親定

我きもこころいほれあはれむせのいほれあ

五十九

俊成つ女

かろかなまけのいほれあはれむせのいほれあ

六十三番 大平いでし浪のいほはうたのれたじく人そほしるん

六十四番 大平いでし浪のいほはうたのれたじく人そほしるん

六十三番

左 勝

客内

わすかけりかろかなまけのいほれあはれむせのいほれあ

六十九

雅經

わすかけりかろかなまけのいほれあはれむせのいほれあ

六十一番 大平難田大平いでし浪のいほはうたのれたじく人そほしるん

かろかなまけのいほれあはれむせのいほれあ

六十二番

左 勝

持中御言

わすかけりかろかなまけのいほれあはれむせのいほれあ

六十九

家隆朝長







侍人... 勝之字... 侍人...

六十八番 親定

思ふこと... 侍人...

六十九番 雅經

御前... 侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...

六十九番 侍人...

侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...

七十番 侍人...

侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...

侍人... 侍人...



侍りておぼしきといふ人御らうく侍りて勝つる  
七十一番 かきわね

左 勝

寛四々

おくわいしうをれらうかほんきしうしうのよれとするあり  
左 有定親 あつしん

おらかひく草葉よりりりよ、鹿のうき後が、あけぬ油の秋風  
油の秋風艶し侍と左此心洞坊後猪うく  
侍りてよりしてよきはとほより侍りて

七十二番

左 勝

片仲 細言

いしりれよーのやよほやじうく右とてかすはう  
左 家隆朝 かたむね

左 勝

家隆朝

いしりてんぬはからうこれゆとて軒端のはく秋風とよく

左平うこれ山風やじうなくすうかばうんかと秋し  
し侍れ左平かばうくこの物とてしひね風  
おくをといつるまうくおく侍とらうくありあり  
りうしうげ給にす侍りいしうも左勝うひう

七十三番

左 勝

親定

いしりはよいしりたかかくしをわうくこれ座ふね風  
左 持僧

いしりせんかくしうとてししういしうかよ後風の坐すよさふ  
左平かばねは山風葉しうかばういしうしう  
侍と左平のくらうたをぶがてしをわ



此らと侍備人思ふかつて侍了りてからとす  
七十に番

左 大長

にふらうつりあふおろしはのほれ思ふいと我かひいりし  
左 大 勝 後かた女

おろしあひいりてふらうつりあふおろしはのほれ思ふいと我かひいりし  
左 大 勝

七十五番 侍と大平まきふ月ちいふしはりてしといふ  
左 大 勝

七十五番 侍と大平まきふ月ちいふしはりてしといふ  
左 大 勝

七十五番 侍と大平まきふ月ちいふしはりてしといふ  
左 大 勝

七十五番 侍と大平まきふ月ちいふしはりてしといふ  
左 大 勝

七十五番 侍と大平まきふ月ちいふしはりてしといふ  
左 大 勝

七十五番 侍と大平まきふ月ちいふしはりてしといふ  
左 大 勝

七十五番 侍と大平まきふ月ちいふしはりてしといふ  
左 大 勝

七十五番 侍と大平まきふ月ちいふしはりてしといふ  
左 大 勝

七十五番 侍と大平まきふ月ちいふしはりてしといふ  
左 大 勝



左大臣 勝十  
頁五

後成仁 勝六  
頁五

清製衣 勝十  
頁一

宮内少 勝九  
頁九

有家 勝三  
頁十

雅經 勝九  
頁六

定家 勝六  
頁六

家隆 勝六  
頁六

權僧正 勝九  
頁三

權中納言 勝一  
頁十一

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 定家, 家隆, 權僧正, 權中納言, 宮内少, 後成仁, 清製衣.*



左大... 清製...

官... 雅...

定... 雅...

藤... 雅...

...

一友

友

...

...



方々深川詩及序六首并合

作者 藤系初定家

親定

荆者 藤系親定

一友 河上友月

友

定家初定

平多隙少祿之々々秋川乃乃加仕家  
方々あふと明見うら九月朝



右

親定

つるしむに秋なる月

清瀬川よりけがれを子に

左 几平 夕陽 月

あつとわくもんふれ

かろいおちれたし右の

しきりもかしくとも

いりしつちやゆり

二友

満ち見は雲

左

定家

と返れうりしは

つるしむに秋なる月

右

親定

ほれふあや

きりすむに秋なる月

左 几平 中 胸 雲 月



いれ物まんとぬらまはしの御  
しむるらんりしとありては  
上と秋風吹くころは昔こそな  
しんか石舟はついでに  
ことよやくしとくくくくく  
はちしとぬと初の人  
しとる糸ふとくもか  
三友 山家秋風

友 定

く風やか山は人の糸  
夏月こかしくと秋風

友 親定

あもりてはあはれ交の  
あきとはともなつと  
た乃舟交のこ  
あきしとるく







友

定家

交ふに乃由しれまけに上は人の後者  
おきと先と人の交ふにせし

右

親定

かけにあらしうのやれまさと相人夫  
まうしれまてくもわれとこと

た乃許由しれまけに人

海家と人のれしをわしたし

くまへ借し為勝

六才

久恋

丸

定家

いゝまぬるまか山に  
おしひ乃まをま

右

親

がしひつゝま

そまあまのまのま



友乃... 可勝

這物... 為

即... 秘

新命

與

早春

春

春

春

春

春

春

春

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋



詠合

題

早春

雪中梅

春雨

暮春

螢

細涼風

草露

殘月

浦霞

山殘雪

花

卯花

夏月

初秋

鹿

霧

若菜

柳

落花

待郭

移川

七夕

浦月

秋興

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



椿衣

霜

雪遠見

忍戀

不逢恋

恨恋

河

山路

紅葉

冬闲居

水鳥

切恋

別恋

曉

關

述懷

時雨

江冰

初戀

夕恋

夕恋

夕竹

野旅

寄神祇祝

作者

講師

讀師

判者

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

*[Faint vertical text on the left side of the page]*



一番

早春

左持

たるるらんせと三輪のりえん山雲のち  
志るーの秋とあさるはのわ

右

足曳のやま嶺のなれましそと  
あやのやとらとる志るはらとる

二番

雨霞

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 雨霞, 雲, 山, 霧, etc.]*



右端

おれちうこじろ露じやらのきふくせ  
をよきしりよきてよんか海ちるん

右 2500 若菜 2100 2100 2100

を波やいこくうらうらうけくま日乃  
なうらのひしりちるんちうらうらじ

三番

若菜

右持

ましえしりるあらんをく集よふし春日  
廻り

ほむじやちうまのうれちるん若

右

いつらうのしりれんまじしうらる乃  
まじし物の子らるのんは

四番

雪中梅

右拍

あしをるるうらうらうらうら梅枝  
しりしりしりしりしりしりしりしり

右



もろききてし程とさかぬかた申  
しりひとくちしむもあはれ

六番

山柳  
結

もしもきくぬきくわのちとぶら  
すしえぬられらるるのこ

右

ふりまはわやとさあめらら春  
けり人さるるにほつ

六番

柳

右  
結

若柳のみららの糸より  
玉成りけり春はあはれ

右

えしとせばはらまき柳の枝よ  
むすむすのせのころり

七番

春雨







ちるしきうらるあまのあまはたみと枝  
はたしきうらるあまのあまはたみと枝

十番

善春

左勝

しれうみーほのあまをいしとあまは  
ことしきうらるあまのあまはたみと枝

右

くしきうらるあまのあまはたみと枝  
しれうみーほのあまをいしとあまは

十一番

卯花

右拵

月ろとくしきうらるあまのあまはたみと枝  
しれうみーほのあまをいしとあまは

右

名しきうらるあまのあまはたみと枝  
しれうみーほのあまをいしとあまは

十二番

待郵公







九  
右

むらぎ野いぢりくす茶よふく茶  
久うやまふくすさきつれく書

右

おかしひふりらあやまの康の坊  
しんきうさく(か)まうしきしは

十一番

酒月

左  
右

まじらふくもささけは流の末晴く

をきすはエらりあひよ月そくく

右

舟しるりりらのきまきこく  
あしうさくさく月はくが

廿二番

新月

左

やまのまふのころなほそれ  
ひきしりえんさくの内

右



しらぬらぬらふのそこの物初  
のさうしうしうと月の影

廿三番

霧

左 お

まじりまじり霧の煙しうをひて

ねとねとこじり雪の物音

右

吹きまらぬらーのともこの秋風

のさける音やうとまじりまじり

廿四番

秋興

左 緒

さうさうとやまらるるうらたに鳥鳴

秋とまはらうと音のうらた

右

あはれは良のみちのうらた

山ももみさうとららり

廿五番

壽衣



左 諸

いそよそらうのまじしよ〜ぬ里か  
おれ〜あうよ衣持らん

右

すれぬめりどころをば持〜くは段  
ほをその人よさうれをいふもり

廿六番

紅葉

左 持

ほ〜ころ〜さよのねのちらしめ

お〜〜こも書衣持らん

右

さ〜〜いひか〜くまを添て紅の  
い〜〜ふやよの紅葉らん

廿七番

時雨

左

あ〜〜ら〜く〜る根のをまれ臨眺て  
い〜〜ひの〜し〜〜時雨らん

右 勝



もねらそりし新さしむるんぬきの  
りぶしちりれて書くそらりぬ

廿六番

霜

左 拵

きりきりしきりきりしきりきりしきりきりし  
しきりきりしきりきりしきりきりしきりきりし

右

しきりきりしきりきりしきりきりしきりきりし  
しきりきりしきりきりしきりきりしきりきりし

廿九番

冬閑居

右 拵

さしちりきはあつ井の火の約いぬ  
しきりきりしきりきりしきりきりしきりきりし

右

いりきりしきりきりしきりきりしきりきりし  
しきりきりしきりきりしきりきりしきりきりし

三十一番

江氷



虎柄

刃はまゝにわたりまゝに後、後にて  
こらりのうしろよすはひりしらすま

右

柄はくしてしるしのはきこられよ  
らるるふふのこころのうらら風

世一番

雷遠見

丸勝

りらうみのなごころに端しあらたて

サマシまたえりちのひらむし

右

うけもらうりおそのりげれ末物で  
けとらんえそむむるち乃とちあま

世一番

水鳥

左柄

まろむしむふ浦輪のまきこのみは  
のこるはまそのあまらるるま

右



みづとらぶのたアるゆるはのうしとらぶ  
むじとひさくちぬくすさちりぶ

廿三番

初戀

左 龍

人きうられにゆきとひるの初小を  
わとと油のつるげのちりぬ

右

おきとひしとちるんひらうきとるく  
つれぬとひぬくすまひ初ぬ

廿四番

忍戀

左 龍

うきわしとちるんひのこまぬきを  
ふしとちるしぬくすまひ初ぬ

右

きりしとちるんひのこまぬきを  
きりしとちるんひのこまぬきを

廿五番

切戀















うねるげのねくしれがほひ路る  
又のすすわをきすもさしゆく

四十三番

左勝

いしききくひをよらうれは  
かちやのいすもさしゆく

右

かきふもさんのほくはく  
しちかきしきわしりんのん

四十四番

左勝

右

いのりらるやうらものも  
い美のもしもぬれけよちある

右

あはしちらわらりあまの  
しきよはらりあまの美

四十五番

野旅



丸箱

けらわらくいなまのりやまをさるるは  
ふしらのものごとくは杖をさく

右

こまじしとしちまじぬ野路のすれ  
かたもとしてを路のじしむをまじ

四十六番

山路

丸箱

ようえうらちやま路の月城結院て

志らうーおらうのくまのさのまは

右

しげまらるあもらしうらるまらるの

ふしうと山路にあらひもしたま

四十七番

。迷懐

左

よの路のよらうとてまをすまをすま

まらうとしおそらあらうま

右



いほゆとくしめきくくちらとや在の神  
くちらよとくしめきくくちらとや在の神

四十八番

寄神祇祀

左お

いししんちんじんてんてん火上の  
ししぬちもあらしんてんてん

右

いししんちんてんてんてんてん  
神のしんちんてんてんてん

和評之抄  
新右衛門  
深下使  
上内直  
神



四十八番

寄神祇

九

神の... 石... 水...

新名所繪歌合

并序

班

和詩之趣其義遠等温盤觴

帝座字不遇法

素鵝地詠流布於富渚河至班鳩宮尔津傳教代之

霸王為吾國之標俗人之有情誰不同然間

陛下德侔之皇恩被四民過塵早設澆樹之荒

聲休靜朝以加長宿宿柳之星光添明八政之

上周道尚煽人九亦人之彙天下特鳩集歌他詠

詩之標雲上且鱗以上所好下而隨也是以神風五

十銜河之下畔仙天四九五洞之... 者一幸門被用松

東右湯樓除老眠路思受路之... 案斯道之事

始自... 棧道不寧夷活國... 甲區竹勝境



葉集古今集今代之勅撰家之并圖志入雅詠無漏  
 循銘然名和泉松之林猶代而不盡申良濤之玉魚  
 格而有餘何矧者國河有勝地指從據各所中之  
 名不名先規洋之新什詠之所以身自所及視聽  
 所觸祖任中丹之銘謹獻後書之量隨則福書結  
 交吟散成會不還至思之郵懶自達亞將之之圖者  
 就唯雄之判加左右之點步開橋藻一有之菟毫  
 將備象葉可代之兔鑑而已

各院以觀此賦賦中頭賦德和品可以  
 然亦先編家之在也

詩合

題

橋本星 春 泉水杜 夏 岩浪星 秋  
 打越瀆 冬 藤皮星 春 河邊星 夏  
 星本星 秋 用河 冬 三津漆 夏  
 大泥橋 新秋

作者

左

右

讀師

讀師

判者

前權大酒公為世卿



一書

極五里 春

左

神波極大副大書在朝上延忠

先... 極五里

右

太神宮一孫宜其葉田神尚良

あ... 極五里

左... 極五里

常... 極五里

太... 極五里

あ... 極五里

あ... 極五里

二書 左

太神宮孫宜其葉田神立成言

あ... 極五里

右

極五里

極五里

極五里

極五里

三書 左

極五里

極五里

右

法眼慈園

極五里

極五里







人物人た教りいささるる可く猪

七番

権神正志本回神主定頼

まゆりし存し心し言く様本外衆を里本名を記す

左

大信師良書

平信孫はく子らりまをく次信孫の母に孫の孫本あり

右純白不唐衆神也

右し上のりしとんれ子す物也定し衆に

平し上のりしとんれ子す物也定し衆に

八番

大信師良書

孫本れししんなるしわさまの河原と記乃しとまを

左

大信師良書

里本名孫本れししんなるしわさまの河原と記乃しとまを

右有共少廻不臣哉

九番

泉水社

定忠

多たひとぬるるがよりしつるしとぬるしとぬる

左

いしつりしれ流りしつりしとんれ本名なりはりし本名

左より信し本名なりはりしとんれ本名なりはりし

し力勝

十番

成言

はけまぬるるがよりしつるしとぬるしとぬる



石

延行

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

二番 石

延行

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

石

延行

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

石

成宗

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

石

長興

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

十三番 石

延行

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

石

良言

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...

石の延行... 延行の石... 延行の石... 延行の石...



十ノ番 左

経頭

御前より御座り申す所は

右

四親

御前より御座り申す所は

御前より御座り申す所は

御前より御座り申す所は

御前より御座り申す所は

十一ノ番

定頭

御前より御座り申す所は

右

良卷

御前より御座り申す所は

御前より御座り申す所は

御前より御座り申す所は

十二番

良親

御前より御座り申す所は

右

良卷

御前より御座り申す所は

御前より御座り申す所は

御前より御座り申す所は

十三番

定忠

御前より御座り申す所は

右

尚良

御前より御座り申す所は







松ノ岩取の里は... 月と  
すはゆあり... 月と

大一番さ

良言

松ノ岩取の里は... 月と

大

良言

松ノ岩取の里は... 月と

左大... 月と

大二し

良言

松ノ岩取の里は... 月と

大

良言

松ノ岩取の里は... 月と

大一番さ

松ノ岩取の里は... 月と

大二し

松ノ岩取の里は... 月と

大一番さ

松ノ岩取の里は... 月と

大二し

松ノ岩取の里は... 月と

大一番さ

松ノ岩取の里は... 月と







女書 七

成宗

子孫はあまのついでに... 後凡そ4と云ふ事あり

右

右

うらうらな松之尾... 高きと云ふ事あり

女九

女九... 高きと云ふ事あり

女九

女九

うらうらな松之尾... 高きと云ふ事あり

右

右

うらうらな松之尾... 高きと云ふ事あり

右 右月科 後

三十番 七

純頭

霜子... 行乃... 七

名親

右

奥の松... 高きと云ふ事あり

左... 高きと云ふ事あり

三十一

定頭

右

良卷

入海の... 高きと云ふ事あり

右 右月科 後

三十二

名親



月影と境もさうしつ水つらにけしむ海の舟船なるも  
右 良惠

わが世をのぼるうら歌のしゆ子を多くとて 浦津より  
右 初又字んゆつはつとて増んたとゆつ衆に

三十一 又さこはさなる事しやてこけむを理りまこ  
元徳し衆を弄りこつたて 勝り

此の巻 藤原屋 春  
左 定志

おのきふの光の移ていふ世と松しを移る若原の室  
右 尚良

三十一 右 尚良

らまらとけらまきてみん松えれすとていふは後原の室  
右 秋原 春 山 ちてこき若代しらきんを

望也治るま ち光の移ていふは門の御ら  
まぶとていふれあてとすはしとわ右子

とていふは山いふはしとて治るまをわわ  
成言

成言 右  
まぬりてまをわわとていふは山いふはしとて治るまをわわ

右  
こい里しあ子父けていふは山いふはしとて治るまをわわ

右あさうふしとていふは山いふはしとて治るまをわわ  
こい里しあ子父けていふは山いふはしとて治るまをわわ



ちと起れぬ所をねのそくをゆきしと里  
るにたりし後分へし

右

交河分春分より春の交る事

右

徳富

交河分春分より春の交る事

右

交河分春分より春の交る事

右

交河分春分より春の交る事

右

右

成宗

里人金子とる河もそらしき

右

長興

後子分河松し

右

下おお

右

長興

ふれ里ありし

右

良言

ふれ里ありし

右



山を越る

北 著 右

佐 頭

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに

右

内 親

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに

北 九 右

定 頭

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに

右

良 春

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに

田 孫 右

高 親

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに

右

良 惠

田 孫 右 河 邊 里 々

左

定 忠

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに

右

高 長

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに

山を越るの事、此の山を越るといふ事は、山を越るに  
あつた事、此の山を越るといふ事は、山を越るに



四拾二番の 成書

みりし入れ河の流るるにす流るるに里るるに舟をいり置るる

浦らるる河邊のしりれをたてし入るるをなす書子

右 左のしりれをたてし入るるをなす書子

浦らるる河邊のしりれをたてし入るるをなす書子

右 左のしりれをたてし入るるをなす書子

四拾三番の 成書

しりれをたてし入るるをなす書子

右 左のしりれをたてし入るるをなす書子

浦らるる河邊のしりれをたてし入るるをなす書子

右 左のしりれをたてし入るるをなす書子

四十四番の

しりれをたてし入るるをなす書子

右 左のしりれをたてし入るるをなす書子

浦らるる河邊のしりれをたてし入るるをなす書子

右 左のしりれをたてし入るるをなす書子

浦らるる河邊のしりれをたてし入るるをなす書子

右 左のしりれをたてし入るるをなす書子

四十五番の

しりれをたてし入るるをなす書子

右 左のしりれをたてし入るるをなす書子

浦らるる河邊のしりれをたてし入るるをなす書子



たれのまほゆしうまは早やいふか何ふ  
ほつこすやまきまき之ゆいおしうた歌を  
まじりてまをり勝

四拾五番 右 恒頭

夕なれ河色けりけりてゆいゆいゆいゆいゆい

右 系歌

ありぬれこるゆいゆいゆいゆいゆいゆい

たのねん 戸のおん ちのねん ちのねん ちのねん

四十七 一 さい 定歌

あまのうら河をのりてゆいゆいゆいゆいゆい

ほろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

たのまゝとたれゆいゆいゆいゆいゆい

四十八番 右 系歌

あまのうら河をのりてゆいゆいゆいゆいゆい

右 良惠

ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

四十九 一 系歌

右 定忠

うたのわらわらゆいゆいゆいゆいゆいゆい

右 当良

あまのうら河をのりてゆいゆいゆいゆいゆい



右大丸... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟...

右才三... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟...

又後番... 成言

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

右... 延新

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

右... 舟...

りみ... 舟... 舟... 舟...

右... 徳田

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟...

六十二番... 成宗

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

右... 長興

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟...







果おこしんをたふのたふりさめいさるるにんはの清のふたふを  
右 尚良

受たねるをいのみるをいさるるにんはの清のふたふを  
右 尚良

六十番左

成言

ワの神をいさるるにんはの清のふたふを  
右 尚良

右

延行

くらねるにんはの清のふたふを  
右 尚良

六十七番

成言

なうと及いのみるにんはの清のふたふを  
右 尚良

右

成言

たふと及いのみるにんはの清のふたふを  
右 尚良

成言

六十八番

成言

なうと及いのみるにんはの清のふたふを  
右 尚良

右

成言

なうと及いのみるにんはの清のふたふを  
右 尚良



こゝを水れこれと云ふといふより色縁  
しつたは之れに優し作りか縁

六十九番 左

ほのちりしののみりしより紅紫後二通て

右 良玄

よむのこゝを水れこれと云ふといふより色縁

右 良玄

七拾番 左

もいげの川の清うた花家とせとせぬ

右 良玄

うたやうののみりしより紅紫後二通て

七拾一番 左  
定頭  
ほのちりしののみりしより紅紫後二通て

七拾二番 左  
定頭  
ほのちりしののみりしより紅紫後二通て

七拾三番 左  
定頭  
ほのちりしののみりしより紅紫後二通て

七拾四番 左  
定頭  
ほのちりしののみりしより紅紫後二通て

七拾五番 左  
定頭  
ほのちりしののみりしより紅紫後二通て

七拾六番 左  
定頭  
ほのちりしののみりしより紅紫後二通て



七拾二番 大正拾 龍林

大正拾 定忠

子らこひん太公の格の後のてきてりりりるの秋の事也

右 大正拾 尚良

とらこひん太公の格の後のてきてりりりるの秋の事也

右 大正拾 尚良

七拾三番 大正拾 龍林

わきあこいなるもりもつる大正拾 尚良

右 大正拾 尚良

わきあこいなるもりもつる大正拾 尚良

七拾四番 大正拾 龍林

七拾五番 大正拾 龍林

七拾六番 大正拾 龍林

右 大正拾 尚良

七拾七番 大正拾 龍林

七拾八番 大正拾 龍林

七拾九番 大正拾 龍林

七拾十番 大正拾 龍林

七拾十一番 大正拾 龍林

七拾十二番 大正拾 龍林

成宗











110X  
113

300



